

福岡市
あり た こ た べ
有田・小田部 45

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第971集

2008

福岡市教育委員会

福岡市早良区
有田・小田部 45

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第971集



平成20年
福岡市教育委員会

序

アジアの拠点都市として発展を続いている福岡市は、古来から海外の新しい文物を受容し、独自の文化や歴史を作り上げてきました。

市内には大陸との交流を示す遺跡が数多く残されています。特に本市の西南部に位置する早良平野には、弥生時代のクニの成立を物語る吉武高木遺跡、弥生時代後期の環溝集落である野方遺跡などの国史跡をはじめとして全国的に有名な遺跡が点在しています。

本書で報告する有田遺跡群は、早良平野の北部に位置する台地に展開する遺跡です。昭和40年に区画整理事業に伴い九州大学文学部考古学研究室が初めて発掘調査を行い、昭和50年度からは福岡市教育委員会が発掘調査を実施しています。平成19年12月までに227次に及ぶ発掘調査を行いました。

これまでの発掘調査によって、弥生時代初め頃の環溝集落や古代官衙と推測される大規模な建物群、戦国時代の小田部城などを発見するなど大きな調査成果を上げています。

今回報告するのは、昭和53年度に実施した第15次調査です。古墳時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が見つかり集落の様子が明らかになりました。発掘から整理、報告に至るまで、地権者の皆様をはじめ関係各位に多大なご協力をいただきました。心から感謝を申し上げます。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、さらに学術研究の資料としても活用いただければ幸いです。

平成20年3月17日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

凡　例

1. 本書は、福岡市早良区有田遺跡群において個人専用住宅建設に伴い、昭和 53 年に福岡市教育委員会が国庫補助事業で実施した発掘調査の報告書である。
2. 有田遺跡群は、早良区有田、小田部、南庄にある通称有田、小田部台地に営まれた旧石器時代から現代に至る複合遺跡で、この名称は『福岡市文化財分布図』に登録記載している遺跡名である。
3. 有田遺跡群の調査報告は、昭和 55 年以来「有田・小田部」の書名に集数を付してきたが、平成 15 年からは集名にかえて数字のみとしている。本書は「有田・小田部 45」である。
4. 有田遺跡群第 15 次調査は、飛高憲雄、横山邦継、力武卓治が担当し、調査現場での遺構実測、遺構撮影は 3 人で分担した。
5. 調査後の資料整理は力武が担当し、遺物実測、遺物撮影、作図と編集、執筆は力武が行った。
6. 遺物図と遺物写真、遺構図の縮尺は下記のように統一している。
遺物図と遺物写真（縮尺 1/3 突帯文土器の写真は 1/2、石器図と石器写真は 1/2、石錐は図、写真とも 1/1）
遺構図（1/50、製鉄関連遺構は 1/30）
なお遺物図の断面は、突帯文土器、弥生土器、土師器類は白抜き、須恵器は黒塗り、陶磁器類と石器類はアミ点で表現している。
7. 検出遺構は略号として次のようなローマ字をつけて記述している。なお掘立柱建物跡の遺構番号については、昭和 61 年に東側隣接地で実施した第 114 次調査報告書からの通し番号としている。
堅穴住居跡 SC 堅穴 SD 掘立柱建物跡 SB 製練炉 SS 土壙 SK ピット SP
8. 本書に掲載している図面類は、すべて磁北（真北より西に約 6 度 20 分偏っている）である。
9. 調査で得た出土遺物、実測図や写真などの記録類は、福岡市埋蔵文化財センター（福岡市博多区井相田 2-1-9 電話 092-571-2921）で収蔵、保管する。誰もが検索し、実見することができる、考古学などの学術研究だけでなく、学校教育や生涯学習など多方面での活用を期待している。

遺跡調査番号	7829	遺跡略号	ART-15
所在地	早良区小田部 5 丁目 54-1	分布地図番号	82 原
開発面積	650m ²	調査面積	500m ²
調査期間	昭和 53 年 8 月 28 日～10 月 2 日	事前審査番号	53-205

本文目次

第1章 はじめに	
第1節 有田遺跡群調査開始のころ	1
第2章 発掘調査の記録	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査の組織と構成	5
第3節 調査地の位置と立地	5
第4節 調査の概要	6
第5節 区割りと土層	7
第6節 遺物包含層の遺物	8
第7節 検出遺構と遺物	14
1. 壊穴住居跡	14
SC01 壊穴住居跡	14
SC02 壊穴住居跡	17
SC03 壊穴住居跡	18
SC04 壊穴住居跡	20
SC06 壊穴住居跡	21
2. 壊 穴	22
SD01 壊穴	22
3. 掘立柱建物跡	29
SB08 掘立柱建物跡	30
SB10 掘立柱建物跡	32
SB13 掘立柱建物跡	32
SB14 掘立柱建物跡	33
SB15 掘立柱建物跡	33
SB16 掘立柱建物跡	35
SB17 掘立柱建物跡	36
SB18 掘立柱建物跡	37
SB19 掘立柱建物跡	38
4. 製鉄関連遺構	38
SS01 製錬炉跡	39
SK01 土壙	39
5. ピット出土の遺物	40
第8節 小 結	41

挿図目次

Fig. 1 有田遺跡群と周辺遺跡分布図 (縮尺 1/25,000).....	2	Fig. 39 114 次調査全景 (南東より)	23
Fig. 2 有田遺跡群調査地点(縮尺 1/7,500)と字図.....	3	Fig. 40 SD01 堅穴 (北西より).....	23
Fig. 3 有田遺跡群報告書番号と掲載調査次数.....	4	Fig. 41 SD01 堅穴出土遺物図① (縮尺 1/3)	24
Fig. 4 15 次調査前 (昭和 53 年南西より)	5	Fig. 42 SD01 堅穴出土遺物 (縮尺 1/2)	25
Fig. 5 15 次調査区と周辺調査区 (縮尺 1/500)	6	Fig. 43 SD01 堅穴出土遺物図② (縮尺 1/3)	26
Fig. 6 表土剥ぎ開始 (東より)	7	Fig. 44 SD01 堅穴出土遺物	27
Fig. 7 I 区造構検出作業 (西より)	7	Fig. 45 SD01 堅穴出土遺物図③ (縮尺 1/3)	28
Fig. 8 II 区造構検出作業 (北より)	7	Fig. 46 SD01 堅穴出土遺物	28
Fig. 9 遺物包含層の遺物図① (縮尺 1/3)	8	Fig. 47 114 次調査 SB08 (北より)	29
Fig. 10 遺物包含層の遺物	9	Fig. 48 114 次調査 SB10 (北東より)	29
Fig. 11 遺物包含層の遺物図② (縮尺 1/3)	10	Fig. 49 SB08 掘立柱建物跡図 (縮尺 1/50)	30
Fig. 12 遺物包含層の遺物	10	Fig. 50 SB10 掘立柱建物跡図 (縮尺 1/50)	31
Fig. 13 遺物包含層の遺物図③ (縮尺 1/3)	11	Fig. 51 SB13 掘立柱建物跡図 (縮尺 1/50)	32
Fig. 14 遺物包含層の遺物	11	Fig. 52 SB14 掘立柱建物跡 (北より)	32
Fig. 15 遺物包含層の遺物図④ (縮尺 1/3)	12	Fig. 53 SB14 掘立柱建物跡図 (縮尺 1/50)	33
Fig. 16 遺物包含層の遺物	12	Fig. 54 SB14 出土遺物図 (縮尺 1/3)	33
Fig. 17 遺物包含層の遺物図⑤ (縮尺 1/3)	12	Fig. 55 SB14 出土遺物	33
Fig. 18 遺物包含層の遺物	12	Fig. 56 SB15 掘立柱建物跡図 (縮尺 1/50)	34
Fig. 19 15 次、114 次調査遺構平面図(縮尺 1/250)	13	Fig. 57 SB15 出土遺物図 (縮尺 1/3)	35
Fig. 20 SC01 堅穴住居跡図 (縮尺 1/50)	14	Fig. 58 SB15 出土遺物	35
Fig. 21 SC01 発掘作業風景 (西より)	15	Fig. 59 SB16 掘立柱建物跡 (縮尺 1/50)	35
Fig. 22 SC01 堅穴住居跡 (西より)	15	Fig. 60 SB16 出土遺物図 (縮尺 1/3)	35
Fig. 23 SC01 出土遺物図 (縮尺 1/3)	16	Fig. 61 SB16 出土遺物	35
Fig. 24 SC01 出土遺物	17	Fig. 62 SB17 掘立柱建物跡図 (縮尺 1/50)	36
Fig. 25 SC02 堅穴住居跡 (北より)	17	Fig. 63 SB17 出土遺物図 (縮尺 1/3)	36
Fig. 26 SC02 堅穴住居跡図 (縮尺 1/50)	17	Fig. 64 SB17 出土遺物	36
Fig. 27 SC02 出土遺物	18	Fig. 65 SB18 掘立柱建物跡 (縮尺 1/50)	37
Fig. 28 SC02 出土遺物図 (縮尺 1/3)	18	Fig. 66 SB18 出土遺物図 (縮尺 1/3)	37
Fig. 29 SC03 堅穴住居跡 (東より)	18	Fig. 67 SB18 出土遺物	37
Fig. 30 SC03 出土遺物	19	Fig. 68 SB19 掘立柱建物跡図 (縮尺 1/50)	38
Fig. 31 SC03 出土遺物図 (縮尺 1/3)	19	Fig. 69 SB19 出土遺物図 (縮尺 1/3)	38
Fig. 32 SC03 堅穴住居跡図 (縮尺 1/50)	19	Fig. 70 SB19 出土遺物	38
Fig. 33 SC04 堅穴住居跡図 (縮尺 1/50)	20	Fig. 71 SS01 製鍊炉跡、SK01 土壌図(縮尺 1/30)	38
Fig. 34 SC04 出土遺物図 (縮尺 1/3)	20	Fig. 72 SS01 製鍊炉跡、SK01 土壌 (西より)	39
Fig. 35 SC04 堅穴住居跡 (北西より)	21	Fig. 73 SS01 製鍊炉跡出土遺物図 (縮尺 1/3)	39
Fig. 36 SC04 出土遺物	21	Fig. 74 SS01 出土遺物	39
Fig. 37 SC04 堅穴住居跡 (114 次検出 北東より)	21	Fig. 75 ピット出土遺物図① (縮尺 1/1, 1/2)	40
Fig. 38 SD01 堅穴、SS01、SK01 図 (縮尺 1/50)	22	Fig. 76 ピット出土遺物図② (縮尺 1/3)	41
		Fig. 77 ピット出土遺物図③ (縮尺 1/3)	42

第1章 はじめに

第1節 有田遺跡群調査開始のころ

昭和49年4月に政令指定都市となった福岡市は、昭和50年に山陽新幹線が岡山駅より博多駅まで延び、さらに九州縦貫道の完成も弾みとなって、アジアの玄関口として、また九州の中核都市として大きく成長を遂げた。開発の波は昭和50年代になって、都心部だけでなく近郊農村まで押し寄せ、自然環境や埋蔵文化財はその保全、保護に猶予のない局面を迎えた。これに対応して福岡市教育委員会では、昭和42年（1967）4月に指導部社会教育課に文化財専門員1名による文化係がスタートした。この年、造成工事で破壊されつつあった今宿古墳群大塚古墳は、地権者の理解を得て国史跡に指定されている。2年後の昭和44年（1963）4月には文化課となり、文化係と文化財係の2係に別れた。文化財係には文化財専門職2名（うち係長1名）を採用配置して埋蔵文化財保護に本格的に乗り出すことになった。この後、先述した九州縦貫道、山陽新幹線や市営地下鉄、博多区板付や西区（現 早良区）四箇田の大型團地建設など公共、民間の大規模開発が相次ぎ、発掘件数増加に伴って毎年数名の文化財専門職が採用された。本書で報告する有田遺跡群15次調査を実施した昭和53年（1978）には、埋蔵文化財担当職員数は15名に増員され、組織的には一応整ったような職員数ではあったが、人口増に伴って交通や上下水道などのインフラ整備、さらに小、中学校建設も急務となり、開発件数は止まることなく増加する勢いであった。文化課ではさらに増員を図り組織を強化する一方、開発に対する事前審査方法、埋蔵文化財の周知化、正確な記録保存そして文化財の活用などについて協議、検討を重ね、実際の業務で試行、実践した。まず事前審査の体制を整え、受付や試掘、さらに開発側との協議、遺跡分布地図の作成、周知などに取り組んだ。発掘調査では正確な記録保存や安全作業のために班編制で臨んだ。また埋蔵文化財センター建設に当たっては、発掘業務と切り離して出土遺物や記録類の活用と保存を専門とする計画、構想案を練った。当時の班編制は事前審査3人（柳田、柳沢、井沢）、公共事業地下鉄班4人（折尾、池崎、濱石、山崎）、緊急調査班8人（板付-山崎、沢、山口、四箇-塙屋、二宮。有田-飛高、横山、力武）に分けていた。緊急調査班は、福岡市の令達事業に加え、民間開発（主に国庫補助事業）に対応するもので、昭和50年度から博多区板付、西区四箇、西区有田の遺跡群については範囲を設定し、個人の小規模開発に対しても迅速に調査を実施していた。班編制は、正確な記録保存や安全作業確保など多方面で有効に機能した。しかしあまりの発掘優先で十分な資料整理の期間確保が困難となり、昭和53年の時点ですでに各職員が5冊以上の未報告書を残しているなど、さまざまな問題を抱えつつあった。しかし事前審査方法が整うにつれ、次第に開発側の理解や協力も得られるようになってきた。重点地区とした有田遺跡群でも、国庫補助制度を活用し調査次数を重ねるにつれて、地元住民から家屋建設予定などを事前に相談する例もあり、埋蔵文化財行政が確実に市民に浸透しつつあった。

有田遺跡群の調査は、土地区画整理事業に伴って昭和40年（1965）に九州大学考古学研究室が行った発掘調査から数えて、平成19年12月末で227次となった。42年の間に風景は一変し、当時の調査地を探すのもそう簡単ではない。当時の関係者も少なくなり、記憶も不確かとなった。だからこそ調査報告書は、発掘記録だけでなく調査上の問題点や背景なども忘れずに記述し、速やかに発行すべきである。本報告書は調査から30年もの年月が過ぎ去り、調査報告書としての意味を持たないが、有田遺跡群の初期の調査状況を知るには役立つであろう。本来は平成18年3月発行の『有田・小田部41』に9～16次調査と合わせ報告する予定だったが、出土遺物が多く、資料整理に手間取ったことから今回の報告となった。調査担当者として大いに反省するとともに、調査や整理にご協力いただいた多くの方々に心から感謝したい。



Fig. 1 有田遺跡群と周辺遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

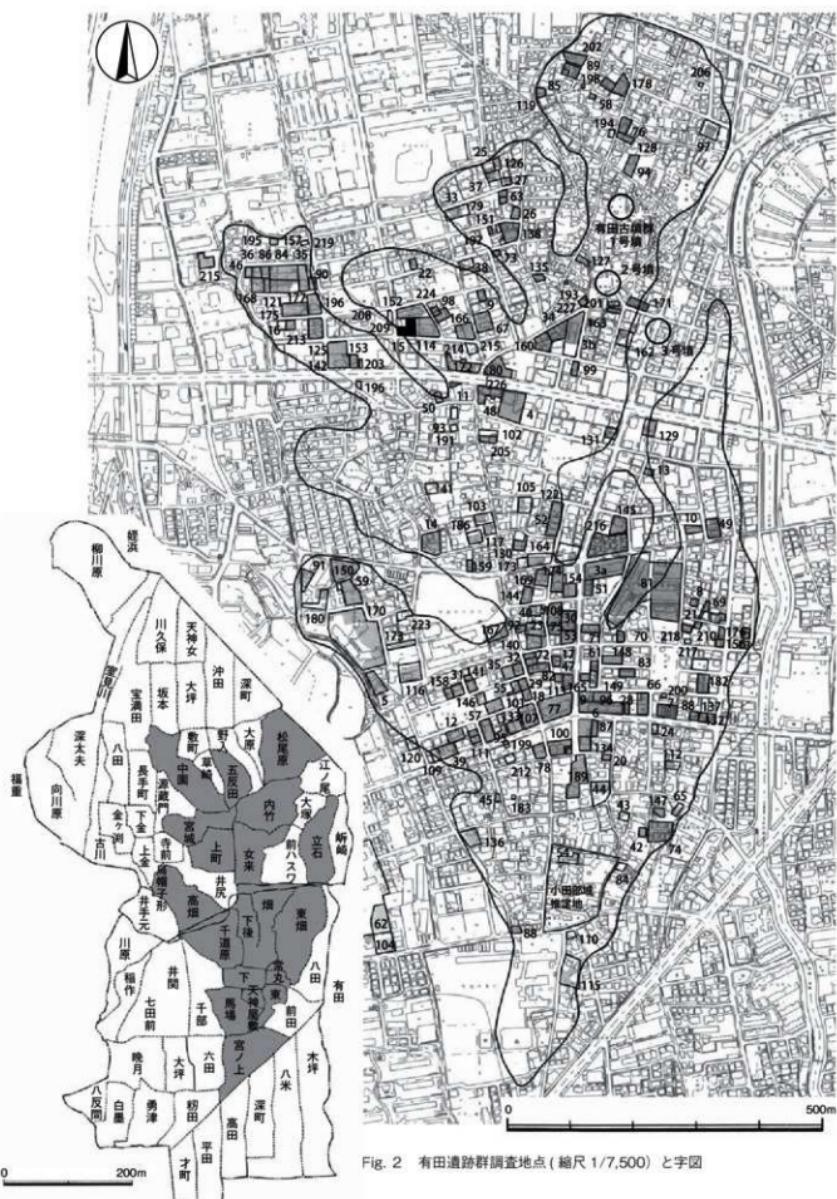


Fig. 2 有田遺跡群調査地点(縮尺 1/7,500) と字図

有田・ 小田部集	埋蔵文化財 調査報告書	発行年	掲載調査次數
	第 1 集	1967	1 「有田古代遺跡発掘調査概報」 20 集まで B 4 版
	第 2 集	1968	2 「有田遺跡－福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告－」
	第 43 集	1977	「有田周辺遺跡調査概報」
		1979	6 「有田・小田部」現地説明会資料（有田遺跡調査班作成）
1	第 58 集	1980	9 · 10 · 11 · 12 · 13 · 14 · 15 · 16 「有田遺跡」（有田遺跡調査班作成）
2	第 81 集	1982	7 · 8 · 28 · 29 · 31 · 33 · 34
3	第 84 集	1982	59
	第 95 集	1983	62 「有田七田前遺跡－有住小学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告－」
4	第 96 集	1983	19 · 32 · 36 · 37 · 38 · 40 · 41 · 42 · 45
5	第 110 集	1984	30 · 44 · 46 · 47 · 48 · 49 · 55 · 63 · 75
6	第 113 集	1985	5 · 39 · 51 · 53 · 56 · 57 · 66 · 76 · 86 · 分布調査資料
	第 129 集	1986	81 「有田遺跡群・第 81 調査－」
7	第 139 集	1986	52 · 59 · 60 · 82 · 83 · 87 · 95 · 97 · 101 · 第 59 次調査の炭化米
8	第 155 集	1987	3 · 43 · 64 · 108 3 次調査の木材
			1987 107 ~ 117 「有田遺跡－1986 年度調査の概要」（有田遺跡調査班作成）
9	第 173 集	1988	35 · 70 · 71 · 72 · 102 · 105 · 109 · 111 · 117 · 122 第 108 次調査追加
10	第 212 集	1989	100 · 103 · 130 · 134
11	第 234 集	1990	107 · 113 · 120 · 131 · 133 · 146 · 149
12	第 264 集	1991	119 · 121 · 126 · 127 · 128 · 129 · 157 · 162 · 144 · 156 第 126 次調査の人骨
13	第 265 集	1991	152
14	第 266 集	1991	118 · 123 · 139 · 155 · 161 原遺跡 5
15	第 307 集	1992	154 · 159 · 163 · 165
16	第 308 集	1992	110 · 112 · 114 · 116 · 138 · 151 · 158 · 164
17	第 339 集	1993	160 · 169
18	第 340 集	1993	125 · 135 · 140 · 145 · 148
19	第 377 集	1994	6 · 50 · 58 · 61 · 65 · 67
20	第 378 集	1994	136 · 141 · 142 · 143
21	第 426 集	1995	147 · 153 第 148 次調査遺物補遺 これより A 4 版
22	第 427 集	1995	54 · 68 · 69 · 73
23	第 470 集	1996	4 · 176
24	第 471 集	1996	74 · 77 · 78
25	第 472 集	1996	172
26	第 473 集	1996	170 · 173
27	第 512 集	1997	178
28	第 513 集	1997	175 · 177 · 179
29	第 538 集	1998	78 · 79
30	第 547 集	1998	80
31	第 574 集	1998	181 · 184
32	第 608 集	1999	188
33	第 649 集	2000	189
34	第 651 集	2000	106 第 147 次調査出土遺物（追加分）
35	第 657 集	2000	182 · 186 · 187 · 190 · 192 · 193
36	第 684 集	2001	115 · 168 · 180
37	第 725 集	2002	124 · 150
38	第 735 集	2003	202
39	第 784 集	2004	194 · 195 · 196 · 201 · 203 · 204
40	第 869 集	2004	205
41	第 870 集	2006	9 · 10 · 11 · 12 · 13 · 14 · 16 · 171 · 183 · 191 · 199 · 198 · 200 · 206 · 210 · 215
42	第 871 集	2006	211
43	第 919 集	2007	216
44	第 920 集	2007	218 · 219 · 222 · 224 · 225
45	第 971 集	2008	15（本書）

Fig. 3 有田遺跡群報告書番号と掲載調査次数

第2章 調査の記録

第1節 調査に至る経緯

昭和 53 年、7 月 8 日付で伊佐茂隆氏より福岡市早良区（当時は西区）小田部 5 丁目 54-1 地内（275 m²）における埋蔵文化財の事前審査申請書が福岡市教育委員会文化課に提出された。先述したように昭和 53 年度は、緊急調査班飛高、横山、力武の 3 人が有田遺跡群とその周辺部の発掘調査を担当しており、5 月から有田遺跡群 9 次調査に着手し、7 月までに 13 次まで 5 地点の調査を終了していた。伊佐氏の申請地は 9 次調査地と同じように有田・小田部台地の北西縁部に位置し、小字名は「五反田」に位置している。その小字名は、水田や低湿地を思わせたが、9 次調査では予想に反して、古墳時代 5 世紀の堅穴住居跡 2 軒（うち 1 軒は時期不明）を確認し、周辺に集落が展開している可能性が強くなつた。このため、伊佐氏申請地でも 7 月末に確認の試掘を行ったところ、申請地内東側でピットや遺物を検出したことから、伊佐氏と本調査に向けて協議を重ねた。開発内容が伊佐氏の個人専用住宅であることから国庫補助事業として実施することになったが、着手日の調整でやや時間を要した。

この年、福岡市は未曾有の大渋水に見舞われ、都市機能が麻痺し市民生活に大きな影響が出た。1 年前からの少雨気象は、梅雨期を迎えても続き、そのまま夏を迎えた。台風も何度も接近、上陸したがいずれも風台風で恵みの雨は空振りに終わり、発掘作業は乾燥しきった地面を相手に悪戦苦闘を強いられた。有田遺跡群 13 次調査後に南区老司観音山遺跡（現在の老司 A 遺跡）の緊急調査を行い、8 月に再び有田遺跡群に戻り 14 次調査を 8 月 21 日に終え、ようやく 15 次調査開始が可能となつた。

第2節 調査の組織と構成

調査委託	伊佐茂隆
調査主体	福岡市教育委員会文化部文化課
調査統括	課長 井上剛紀 係長 三宅安吉
調査庶務	古藤国生、鈴木由喜（現）
事前審査	柳沢一男、井澤洋一
調査担当	飛高憲雄、横山邦繼、力武卓治
整理作業	宮崎まり子、山中香欧里 花畠照子、花田早苗、渡辺敦子



Fig. 4 15 次調査前（昭和 53 年 南西より）

第3節 調査地の位置と立地

早良平野は、北の博多湾に向かって逆三角形に開けており、その中央部を室見川が北流している。有田遺跡群が展開している台地は、早良平野のやや北寄り、室見川右岸に位置する標高 10 m 前後の洪積世台地である。台地は西の室見川と東の金屑川との浸食で南北に長い逆三角形となり、北側はいくつかの谷が入り込んで大小 8 個の突出部がある。あたかも手のひらやヤツデの葉のような形状となつてゐる。昭和 53 年当時はまだ「小田部大根」で有名だった畑地が至る所に残っていたが、現在ではほぼ全面が開発され、個人住宅やマンション、商業ビルが密集している。

15 次調査地がある突出部は、8 個の突出部のうち東より 5 番目に位置する。この突出部は国道 202

号線に架かる小田部横断橋を基点にして、北西方向に約 290 m 延びており、幅は約 150 m を測る。本来は突出方向と同じように尾根状の高まりが北西方向に走っていたと推測される。この突出部での調査は平成 20 年現在 15 地点を数えるが、当時は 9 次調査の 1 地点のみであった。この突出部の東側斜面に当たる 9 次調査では、古墳時代の竪穴住居跡を検出しており、今回の 15 次調査地はその反対側の突出部西斜面に位置していることから、集落の広がりを把握する上で大いに期待された。

第4節 調査の概要

昭和 40 年から始まった有田土地区画整理事業によって、旧地形は造成されて平坦な区画地となり、昔日の景観を想像するのは不可能である。伊佐氏によると、敷地の西側で急激に台地が落ち込み、その縁に沿って「庚申道」と呼んでいた小道があり、その西側には水田が広がっていたということであった。7 月末に実施した試掘でも西側部は深さ 2 m 程落ち込んで遺構が存在しない事を掴んでおり、この部分を廃土置き場に利用して遺構検出を主に東側に絞ることにした。

発掘調査は 8 月 28 日に周辺の測量やレベル移動を済ませ、翌 29 日よりパワーショベルを使ってまず造成時の埋め立て土と旧畑耕作土剥ぎにかかった。有田遺跡群では広い範囲で削平を受けていることから、表土や耕作土直下で地山のローム面が現れることが多いが、ここでは遺物を含んだ（黒）褐色土が一面に広がっており、おそらく西側に類く斜面上に遺物包含層が形成されたものと推測した。時間をかけた自然的な堆積であれば、地層ごとに遺構の検出も十分に可能であることから、発掘作業員の手作業に切り替えて層位ごとの掘り下げと遺構検出作業を試みることにした。

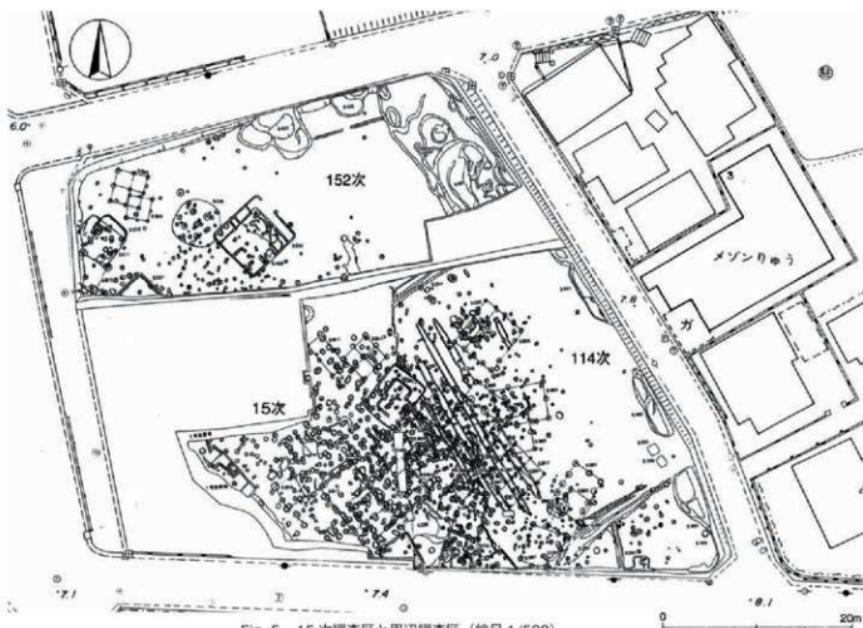


Fig. 5 15 次調査区と周辺調査区（縮尺 1/500）

調査の結果、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、堅穴、製鍊炉、土壤、そして無数の小ピットなど古墳時代から古代におよぶ各種遺構を検出した。9次調査で確認していた古墳時代集落が台地突出部の西側斜面まで展開していることを把握できた。出土遺物はコンテナ14箱分あり、弥生時代開始期の突宍文土器や弥生土器、古墳時代の土師器や須恵器、古代の鉄滓、中世以降の陶磁器類など多様な遺物が含まれている。約1か月後の10月2日に15次調査を無事に終え、次に横山と力武は田隈中学校建設地の西区高柳遺跡に移動した。

第5節 区割りと土層

調査対象地の平面形は、長方形二つを直角に組み合わせた逆L字形をしてい。伊佐氏の設計計画によると、東西方向の長方形約15m×約24mについては日程が迫っていることから先に造成する必要があり、ここをI区、残りの南北方向約10m×約29mをII区として区割りをし、I区から調査を進めることにした。さらに2m方眼を組み、縮尺1/20の遺構平面図を作成した。この方眼には、特にグリッド名は付けていない。遺構番号は、堅穴住居跡、堅穴、ピットなどの遺構ごとに通し番号を付けている。

調査区南壁中程の標準的な土層は、約1mの造成土下の1層（褐色土。造成前の畑の耕作土、約20cm）、2層（褐色土。耕作土よりやや黒みを帯び、よく縮まる。約15cm）、3層（粘質黒褐色土。遺物の包含量が増える。約10cm）である。3層下のロームはやや黄色を帯びた褐色で、標高は調査区東端で75m、西端で60mを測り、その差は1.5mである。等高線は旧地形の尾根線方向と同じように北西方向から南東方向へ走り、II区長軸に対して約55度である。等高線の間隔は東西ではほぼ大差なく、緩やかな傾斜となっているが、西端で大きく落ち込み、小さな崖状となり、伊佐氏の話しの「庚申道」を裏付けた。



Fig. 6 表土剥ぎ開始 (東より)



Fig. 7 I区遺構検出作業 (西より)



Fig. 8 II区遺構検出作業 (北より)

第6節 遺物包含層（1～3層）の遺物

地層によって出土遺物の種類や時期の違いが把握出来ないか検討したが、1層～3層の出土遺物は、古墳時代の遺物を主として弥生時代～古代までの遺物が混在し、期待していた地層による著しい違いは見られなかった。ただ製鉄関係遺構は、3層で検出し、遺構の上限時期を考える上で参考となつた。各遺構の説明の前に包含層出土の遺物を一括して記すが、二次的な堆積のために土器は細片と

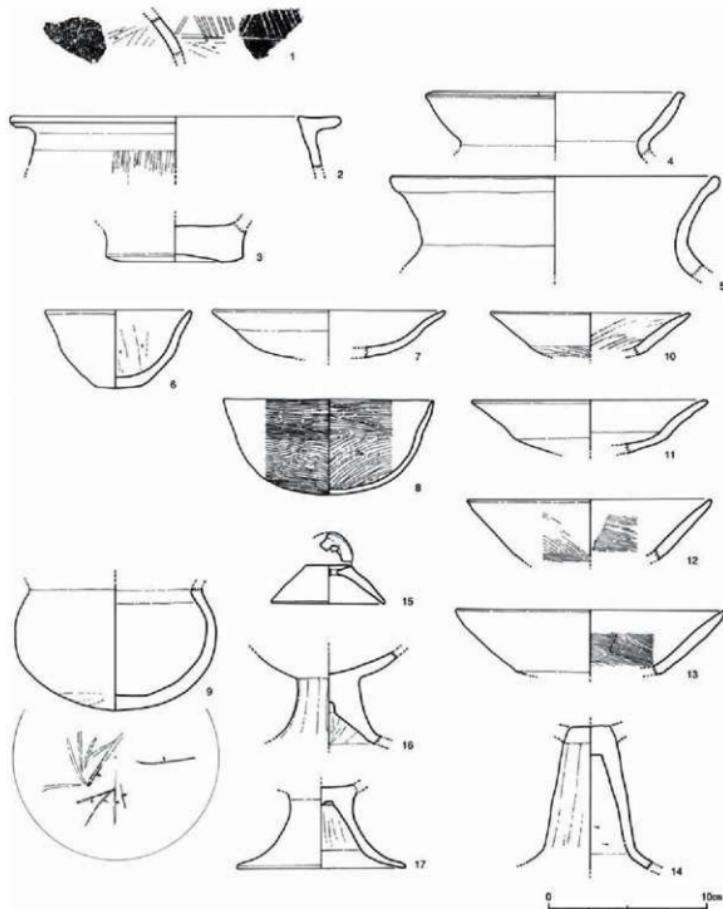


Fig. 9 遺物包含層の遺物図① (縮尺 1/3)

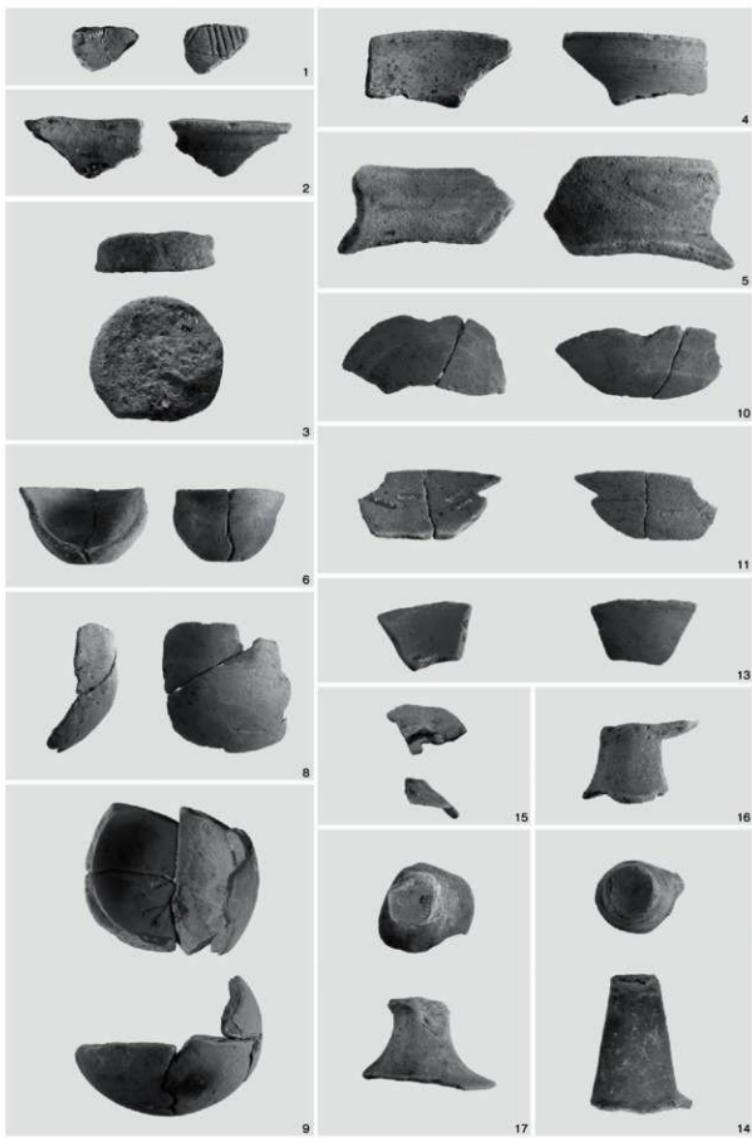


Fig.10 遺物包含層の遺物

なり、図示した遺物は43点に留まつた。堅く焼成されている須恵器はその分残りがよく、また実測容易であったことから約5割に近い21点を図示しているが、圧倒的に多いのは古墳時代の土師器である。したがって図示した点数は出土遺物や器種割合を反映したものではない。

Fig.9は弥生土器と古墳時代の土師器。1は弥生時代前期の壺。胸部上半の文様帶で、細いヘラ状工具で沈線を描いている。2は弥生中期のL字形口縁部を持つ壺。

本調査区での弥生土器出土はきわめて少量である。3は厚みのある円盤状の底部で、わずかに上げ底となっている。土師器には壺、壺、鉢、高坏などの器種がある。4、5はく字形に強く屈曲する口縁部を持つ壺、5の口縁部は、肥厚して帯状断面となっている。8は内外面とも細かな横ミガキ。9は小型丸底壺。外面は丁寧な横ミガキで滑らかな器面となっている。底部に板状工具による調整痕がキズ状に残る。10～14は高坏。12は坏部が深い器形である。15はハ字形に開く脚としだが、上部に小孔があり、用途、器種とも不明。

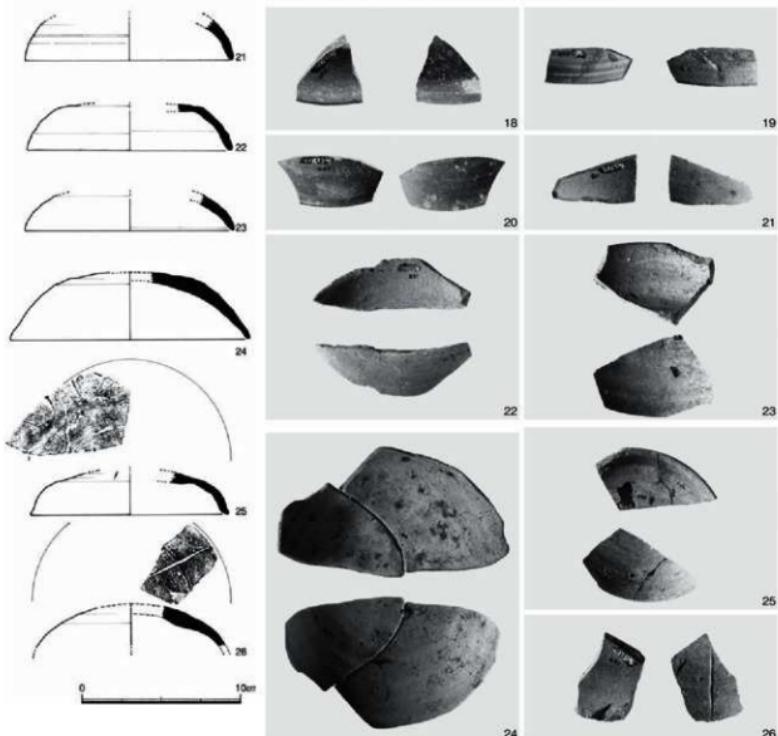


Fig.11 遺物包含層の遺物図②
(縮尺 1/3)

Fig.12 遺物包含層の遺物

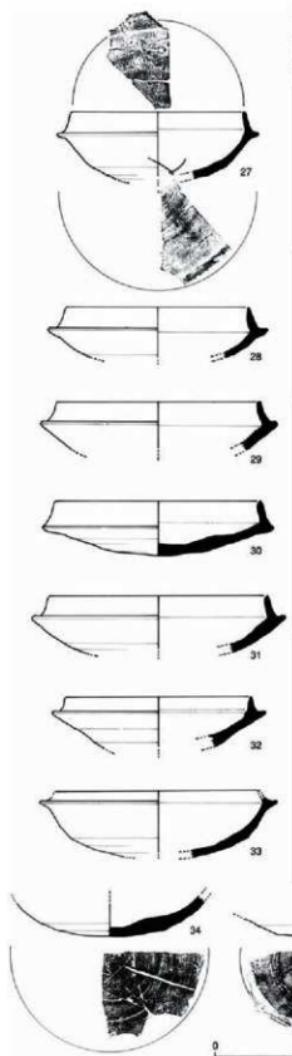


Fig.13 遺物包含層の遺物図③
(縮尺1/3)

Fig.12は須恵器の壊蓋。18～20はわずかに口縁部が立っているが、他は天井部からそのままの湾曲で口縁部となっている。23の口縁部内面には、小さな段があるが、ほとんど丸みのある断面。天井部のヘラ削りは、天井部の1/3程に過ぎない。25、26の天井部にはヘラ記号がある。

Fig.13は須恵器の壊身。27は薄手の作りで口径が最も小さい。底部は丸みがあり、その分深さがある。受部は小さく水平に突き出しつつ、たちあがりは直線的に延びて



Fig.14 遺物包含層の遺物

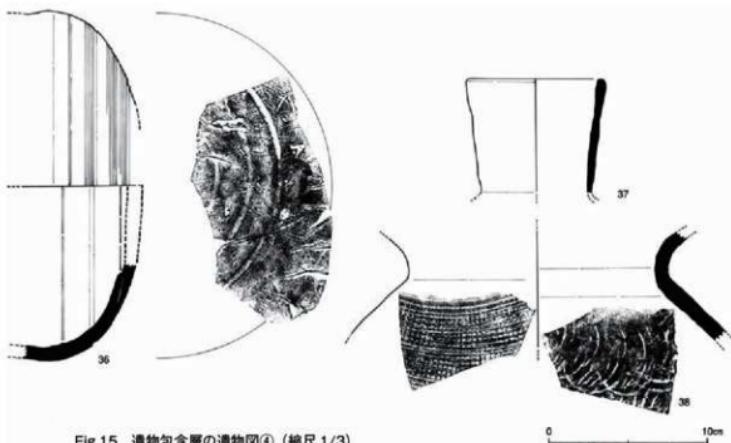


Fig.15 遺物包含層の遺物図④ (縮尺 1/3)



Fig.16 遺物包含層の遺物

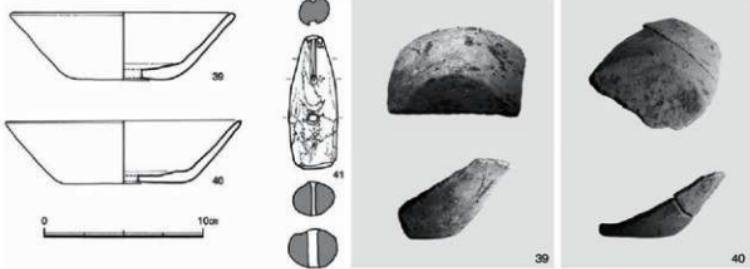


Fig.17 遺物包含層の遺物図⑤ (縮尺 1/3)

Fig.18 遺物包含層の遺物

いる。ヘラ記号が底部内面にある。28、29はたちあがりが長く、内湾しながら延びている。またその先端は丸細い断面である。32は底部を欠いているが、直線的に外に開く器形である。受部は小さく、たちあがりは直に立つ。身との接合部が段となっている。34、35はヘラ記号のある底部破片。壺蓋の可能性もある。

Fig.15は須恵器の提瓶、長頸壺、甕。36に被蓋部が残っており、提瓶として図化した。外面は粗いカキ目で、

ヘラ記号を加えている。37は破片であるが、直線的に長く延びていてことから長頸壺とした。器壁は薄いが微妙な凹凸があり、整った作りではない。38は甕の頭屈曲部。体部外面は平行叩きの後に強く回転横ナデを加えている。内面は青海波文の叩き痕。

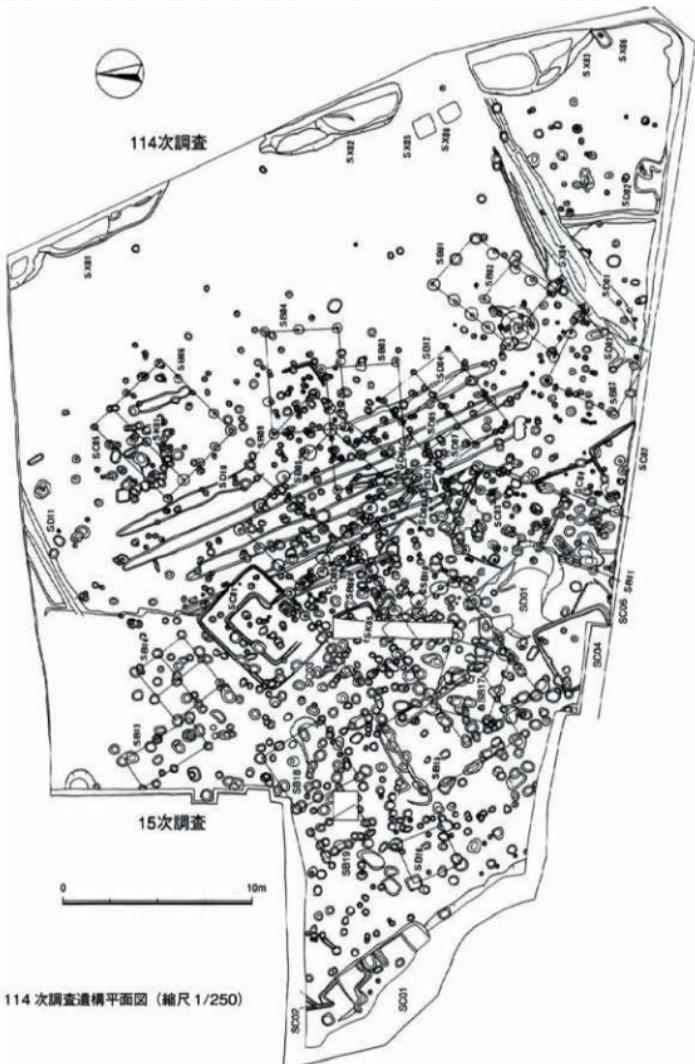


Fig.19 15次、114次調査構造平面図（縮尺1/250）

第7節 検出遺構と遺物

検出遺構は堅穴住居跡、掘立柱建物跡、堅穴、製鉄関係遺構と小ピットである。堅穴住居跡や掘立柱建物跡については、その後隣接地で実施された114次、209次調査の遺構平面図と合成して作成している。ただ114次の調査報告書作成時に、遺構番号の調整を徹底しなかったこともあって遺構番号が重複しているものがある。特に掘立柱建物跡については、114次調査報告書での呼称を基本的に活かしており、修正した遺構については、その旨明記している。

1. 堅穴住居跡

15次調査時点では、SC01～SC06の6軒を検出したが、いずれも調査区外に出ており、特にSC01と切り合ったSC02は、壁溝と思われる細い溝が調査区外に延びていることから堅穴住居跡とした。さらにもう1軒の堅穴住居跡が重なっている可能性があった。209次調査によって、溝の延長部が現れて堅穴住居跡に確定できしたことから、これをSC02とする。114次調査では、計7軒の堅穴住居跡が検出、調査されているが、114次報告書のSC01、06、07の3軒は15次調査で調査区外で未掘となっていたものの再調査である。ただし同書ではやや誤植があってSC01は15次ではSC03、同書SC06は15次ではSC05、同書SC07は15次ではSC04に当たる。また15次の報告書である本書ではSC05を堅穴住居跡ではなく堅穴とし、SD01としている。

SC01 堅穴住居跡 15次調査のSC01は、調査区西端部で検出した。114次調査のSC01とは異なる。西側が大きく削られて全体の規模は不明。辛うじて東壁と床面の一部が残っていることから元の形状を推測出来る。東壁の長さは6.4m、わずかに外膨らみの直線で、N-39°-Eの方向である。この方向は、本調査区が位置する突出部の尾根線方向にはほぼ一致している。東壁は直に近く掘り込まれ、

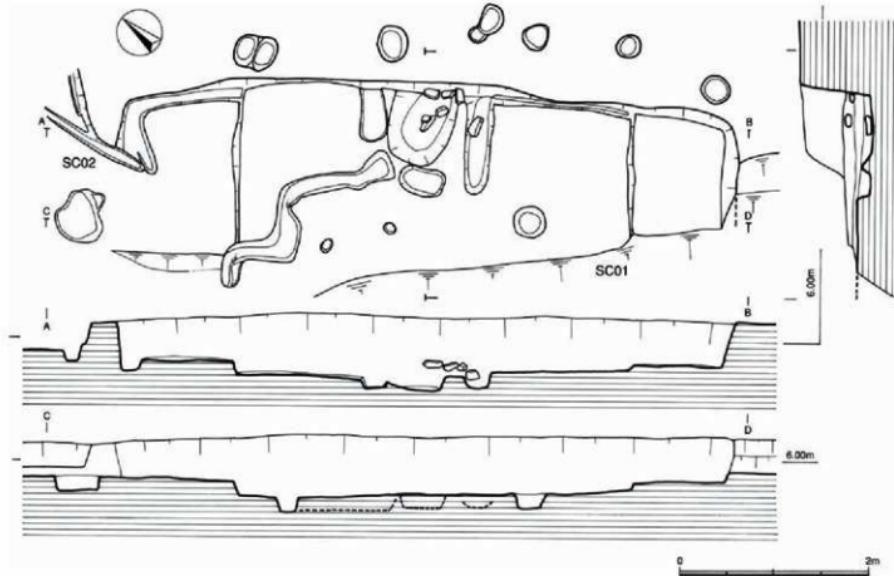


Fig.20 SC01 堅穴住居跡図（縮尺1/50）

約70cmの高さが残っている。東壁両端は丸みをもって直角に折れ、この南、北壁に沿って床面に幅約1m、高さ7~15cmのベッド状の貼り床がある。床面は西側に約2mが残るだけで、西壁にも同じような貼り床があったかは確かめようがない。また壁溝は全周していない。東壁の中央部には、楕円形の小さなピットがあり、その両側に幅約30cmの深い溝が開んでいる。焼土や炭化物はないが20



Fig.21 SC01 発掘作業風景（西より）



Fig.22 SC01 竪穴住居跡（西より）

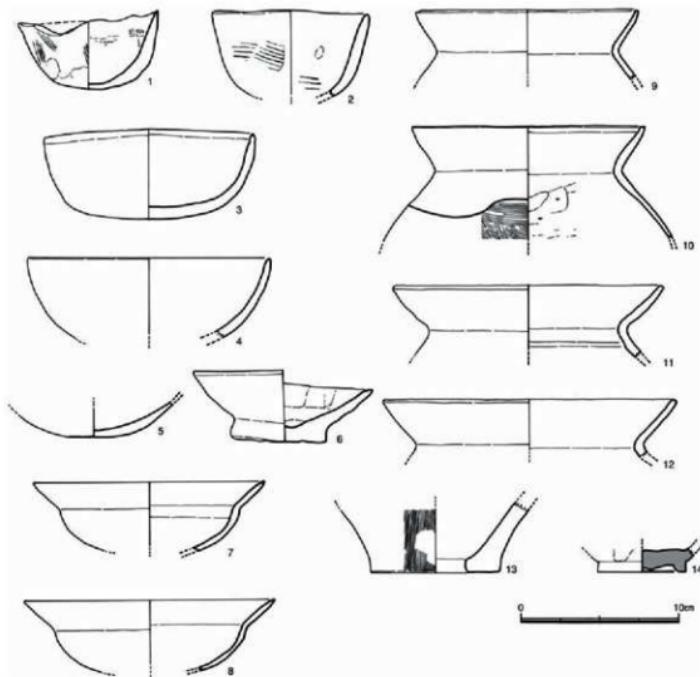


Fig.23 SC01 出土遺物図 (縮尺 1/3)

cm大的7個の角縁が乗っている。同じようなピットを持つSC03では入り口と考えられている。床面には他に数個の小ピットがあるが、どれも浅く主穴として特定できない。また不規則に蛇行する小溝があるが、この竪穴住居跡に伴うものではないだろう。北壁には別的小溝が調査区外の北に延びており、竪穴住居跡の壁溝と判断してこれをSC02とした。このSC02にはもう一つ小溝が斜めに接しており、計3軒の重複を考えたが、あまりにも部分的であることから調査時点では番号を与えない。SC01とSC02の先後関係は、住居内覆土では明瞭な切り合いの差がなく確認出来なかつたが、SC02の東壁と壁溝が途切れていることからSC02が切られないと判断した。竪穴住居跡の使用期間や廃棄時期を示すような状況で出土した遺物はない。

出土遺物 Fig.23に図示した15点のうち、1～12は土師器、13の弥生土器と14は中国製青磁で混入であろう。またSC01の時期を直接示すような状況で出土したものはなく、すべてが覆土出土である。1～8は鉢。7、8は外反口縁鉢。滑らかな器面となっているが特に横ミガキ痕は見られない。9から12はく字形に強く屈曲する口縁部を持つ布留系甕。10の口径は14.8cm。胴部下半の調整は、縦ハケ目でその上部に波状の沈線を1本巡らしている。内面は逆時計回りのヘラ削り。

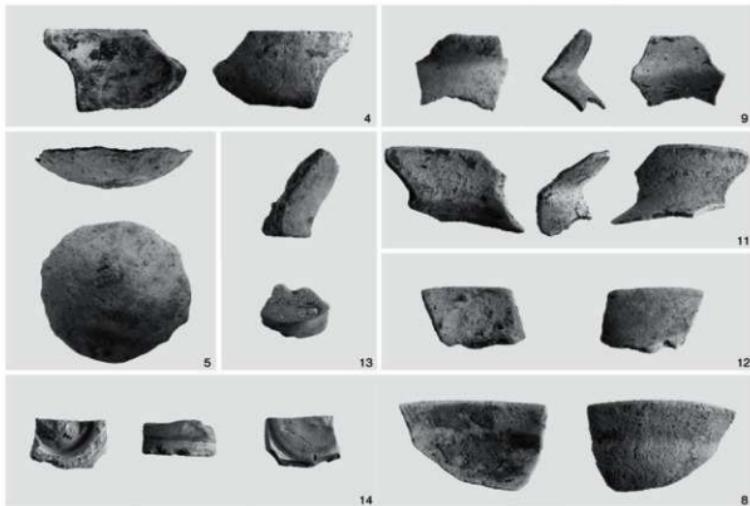


Fig.24 SC01 出土遺物

SC02 積穴住居跡 SC01 の北壁より北に伸びる小溝を壁溝と判断して SC02 とした。平成 16 年 5 月の 209 次調査によって、小溝の延長部と北隅が検出されて壁溝を持つ積穴住居跡と確定出来た。壁溝の長さは合わせて 3.06 m。壁の高さは 32 ~ 51cm 前後、壁溝の幅は約 18cm、深さは 5cm 前後である。15 次調査時点でもう 1 軒の重複を考えていたが、やはり SC02 の軸にはば 45 度に交わる壁溝を持つ壁コーナーが見つかり、結局当初の予想通りに 3 軒の積穴住居跡が重なっていることが分かった。現在は大きく削り落とされて崖になって、住居地としては適していないが、このように積穴住居跡が集中していることからすると、斜面はさらに西側に延びて広い敷地が確保されていたのだろう。また重なる 3 軒の住居跡は壁の方向に統一、連続性がなく、かなり長期間の立て替えを推測させる。

出土遺物 Fig.27 は 15 次調査出土に限って図示している。小範囲であったことから 2 点に過ぎない。1 は覆土出土の土器師甕。口径は 24.2cm と大きく、頸部から直線的に外反している。外面は左斜行の粗いハケ目後に横ナデを加え消している。2 は弥生土器の甕底部。平底で外面に縱ハケ目がわずかに残っている。時期の異なる 2 点の遺物なので、SC02 の時期決定は 209 次調査本報告を待ちたい。



Fig.25 SC02 積穴住居跡 (北より)

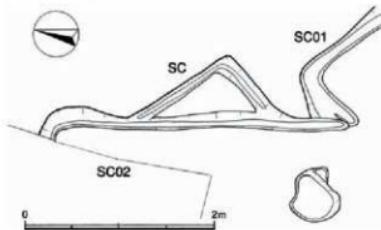


Fig.26 SC02 積穴住居跡図 (縮尺 1/50)



Fig.27 SC02出土遺物

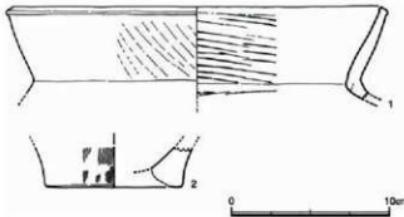


Fig.28 SC02出土遺物図 (縮尺1/3)

SC03 積穴住居跡 15次調査ではII区東端境界で検出した。北東隅が調査区外に出ており未掘になっていたが、114次調査によって残り部分を検出し全形が分かった。114次の報告書ではSC01の番号を付けて詳細に記述されているので、本書では規模や構造などに限って記す。新たに検出した長辺を東壁とする、短辺の長さは北壁4.1m、南壁3.9mで、わずかに北壁が長い。長辺では東壁5.66m、西壁5.44mを測り、短辺壁と同じように約20cmの差がある。計測では歪んだ長方形だが見かけ上はよく整った長方形プランである。南西隅は残りが悪いが、他コーナーは隅丸となっている。4壁とも削平されており壁高は最大で20cmに過ぎない。東壁中央部で途切れているが、床面には約90cm幅、高さ約7cmに地山粘土を貼り付けたベッド状遺構が巡っている。このベッド状遺構が途切れている東壁中央部には、長楕円形60×88cm、深さ24cmのSP174があり、114次調査報告書では入り口と想定されている。南壁を除く壁下とベッド状遺構には、幅約15cm、深さ5cm前後の細い溝が巡っている。床面北東側でベッド状遺構の小溝に接して長さ約40cmの炭化材が残っていたが、この他に炉跡と思えるようなピットや焼土は見られなかった。



Fig.29 SC03積穴住居跡 (東より)

床面には20個を超すピットがあるが、SC03の主柱穴は深さ38cmのSP170と深さ46cmのSP172の2本柱であろう。その間隔は2.55mを測る。

出土遺物 覆土からは弥生土器や土師器が出土しているが、点数は少なく、またほとんどが小片のため図示したのは1点のみである。Fig.31の1はSP204出土の弥生土器。広口壺の口縁部で、内面に粘土縫を貼り付け、幅広の口縁となっている。114次調査報告書では、土師器の小型丸底壺と磨石が掲載されており、SC03の時期は古墳時代前期の布留式土器併行期と考えられている。



Fig.30 SC03出土遺物

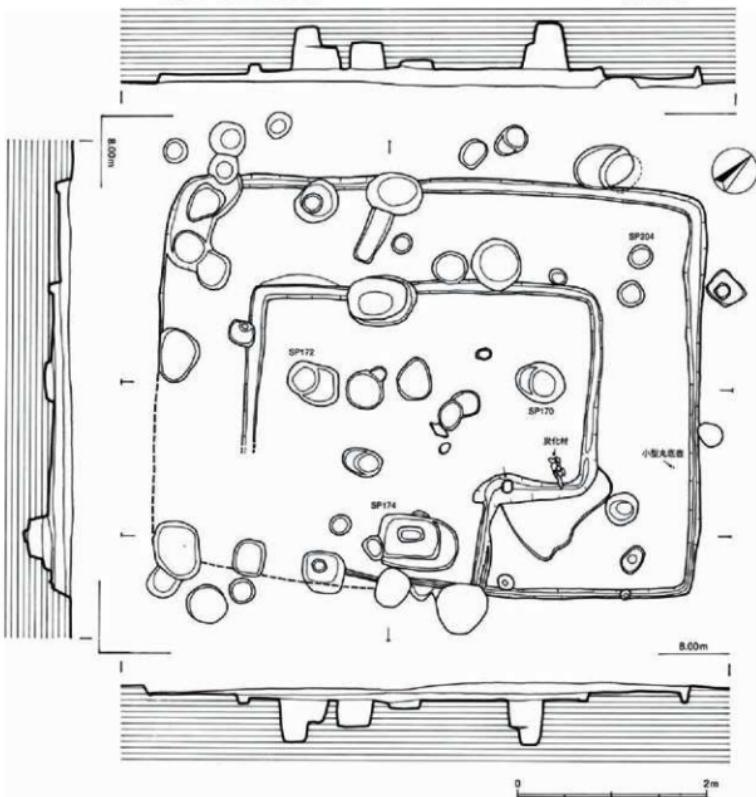
Fig.31 SC03出土遺物図
(縮尺1/3)

Fig.32 SC03整穴住居跡図 (縮尺1/50)

SC04 穹穴住居跡 II区南東隅に位置する。大半が南側の道路と調査区外に出ていたが、114次調査によって南東隅部を検出でき、規模や平面プランが明らかになった。合成図で計測すると、東壁3.82m、北壁3.74mではほぼ正方形に近く、隅丸方形のプランである。4壁下には幅18cm前後の小溝が巡り、床面からの深さは約10~19cmと均一でない。114次調査部の壁溝が幅広い。床面には微妙な凹凸があるが、ほぼ水平で、いま6個のピットが残る。どのピットも浅く、壁際に片寄っていることから主柱穴とは考えにくい。床面中央より西側寄りに、アミ点で示した範囲で焼土がまとまって見られた。ベッド状遺構はない。

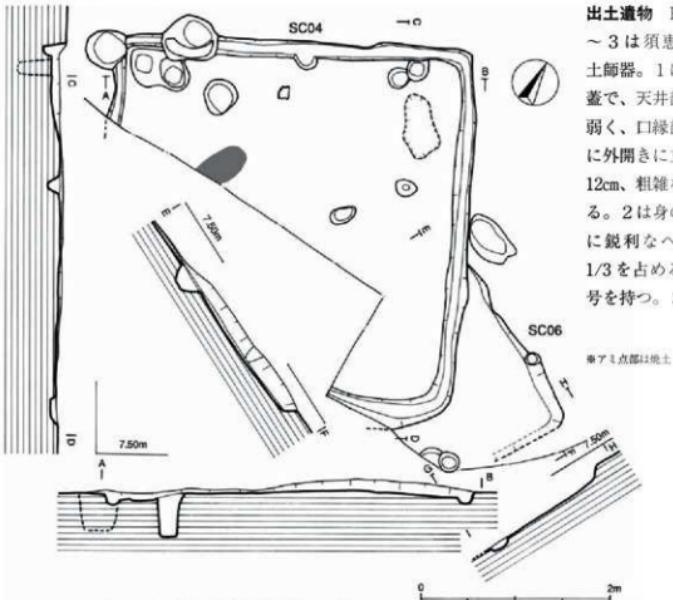


Fig.33 SC04 穹穴住居跡図 (縮尺1/50)

出土遺物 Fig.34の1~3は須恵器、4は土師器。1は須恵器の蓋で、天井部の丸みが弱く、口縁部はわずかに外開きに立つ。口径12cm、粗雑な調整である。2は身の底部、割に鋭利なヘラ削りで1/3を占める。ヘラ記号を持つ。3も同じよ

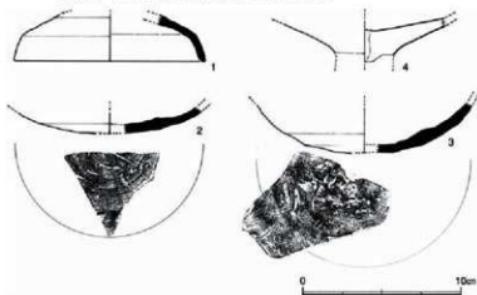


Fig.34 SC04 出土遺物図 (縮尺1/3)

うにヘラ記号がわずかに残る。やや焼成が悪く、底部は軟質で痘瘍状となっている。かすかにヘラ記号が認められる。4は土師器の高壺。脚部と壺部の接合部で離れている。精良土を用いており、壺部内面は滑らかな調整となっている。



Fig.35 SC04 竪穴住居跡（北西より）



Fig.36 SC04 出土遺物

SC06 竪穴住居跡 調査区境界のためやや慎重さを欠いたが、SC04 覆土掘り下げ中に SC04 東壁を切って南東方向に直線的に延びる壁に気がついた。高さ 10cm 程の壁は 1.94m 南東に延びて直角に曲がり道路下に入り込んでいる。床面に壁溝はない。SC04 と重なる部分については、うまく壁を検出できなかつたので全長は不明だが、これを SC06 とした。しかし 114 次や 152 次など周辺部での調査で検出した竪穴住居跡のはほとんどが尾根線に平行か直交するのに対し、SC06 の方向は N-63°-W とやや様子が異なる。実測可能な遺物はない。



Fig.37 SC04 竪穴住居跡（114 次検出 北東より）

2. 壺穴

SD01 壺穴 調査区南東隅の3層で径約5mの範囲から土器や鉄滓が多く出土しはじめた。了解を得て東側境界部へ拡張し遺構検出作業をしたところ、後述する精錬炉と土壤を確認した。さらにその下部からも遺物出土が相次ぎ、その南西側ではSC04、06の2軒の壺穴住居跡も現れたことから、壺穴住居跡の可能性を想定し、SC05の番号を付けて掘り下げ作業を進めた。覆土は他の壺穴住居跡と同じ黒褐色土で、土師器、須恵器の他に下部から突帯文土器も出土し、期待は膨らんだ。しかしその壁は、他の多くのピットと切り合って本来の形状を留めず、長軸4.9m、短軸4.0mの不整橢円形プランとなつた。しかも床面は水平ではなく、中央部に向かって傾斜し、中央部の深さは約30cmである。壁の立ち上がりも斜めであり、壁溝も柱穴と思われるピットもないことから、調査後の資料整理段階で壺穴住居跡ではなく、壺穴として新たにSD01壺穴と言い換えた。出土遺物には須恵器や土師器、突帯文土器があり、突帯文土器がやや覆土下部で出土する傾向ではあるが、覆土の層位を区別できるような違いは認められない。おそらくSD01は人為的な掘削ではなく自然の窪地に遺物が堆積したものであろう。なお北西壁寄りの底面で70×110cmの橢円形状に黒色炭化物が5~7cm厚さで見つかっている。

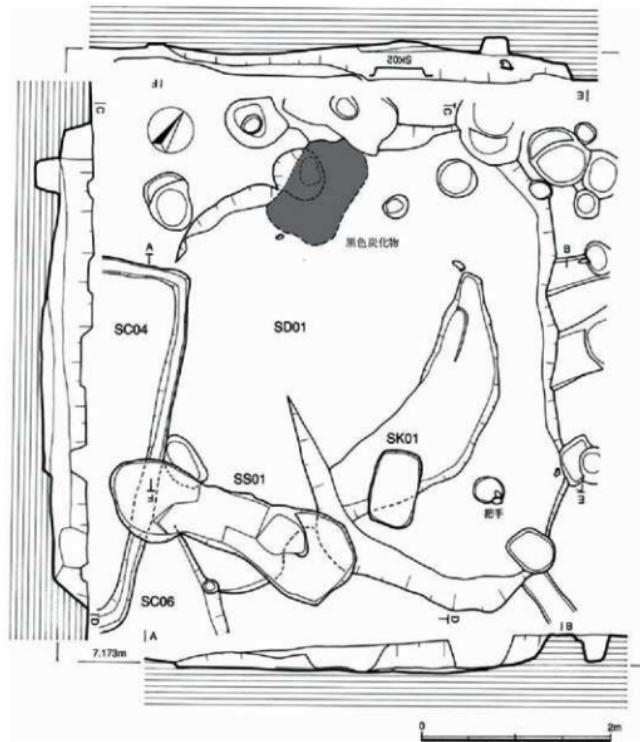


Fig.38 SD01 壺穴、SS01、SK01 図 (縮尺 1/50)



Fig.39 114次調査全景（南東より）



Fig.40 SD01 壁穴（北西より）

出土遺物 Fig.41の1～11は突帯文土器の甕。図の縮尺は他の遺物図と同じ1/3だが、写真は他と異なり1/2縮尺で割り付けている。口縁部の傾きには、外傾するもの（1～4）、内傾するもの（5、6）、直立するもの（7）の3様がある。また突帯の貼り付け位置やその断面、さらには突帯刻み目の形状などで細かな分類も可能である。ここでは口縁部傾きの違いでまとめている。

1は外傾する口縁端に接して三角形断面の突帯を貼付している。口縁端の断面は方形で三角形突帯に連続して幅広の口縁部となっている。2は口縁端部の断面は丸みのある方形で、小さめの三角形突帯を接して付けている。刻み目は小さな菱形で、浅い。外面は剥離が進んでいるが、左斜行の条痕が認められる。3は同じように方形断面の口縁部で、蒲鉾形断面の突帯がやや被さるように付いている。逆D形の刻み目はほぼ等間隔だがシャープではない。外面は左斜行のナデ上げ調整を加えている。4も外傾する口縁部だが、端部近くの内面を強く横ナデして微妙に窪んでいることから、直に立ち上がっている。三角形突帯の上面はやや凹んでいる。刻み目は形状、間隔とも不揃いで、かすかに木目痕が見られる。おそらく板状工具小口の痕跡であろう。5は強く内傾した口縁部に、蒲鉾形の突帯を上方に突き出したように付けており、特異

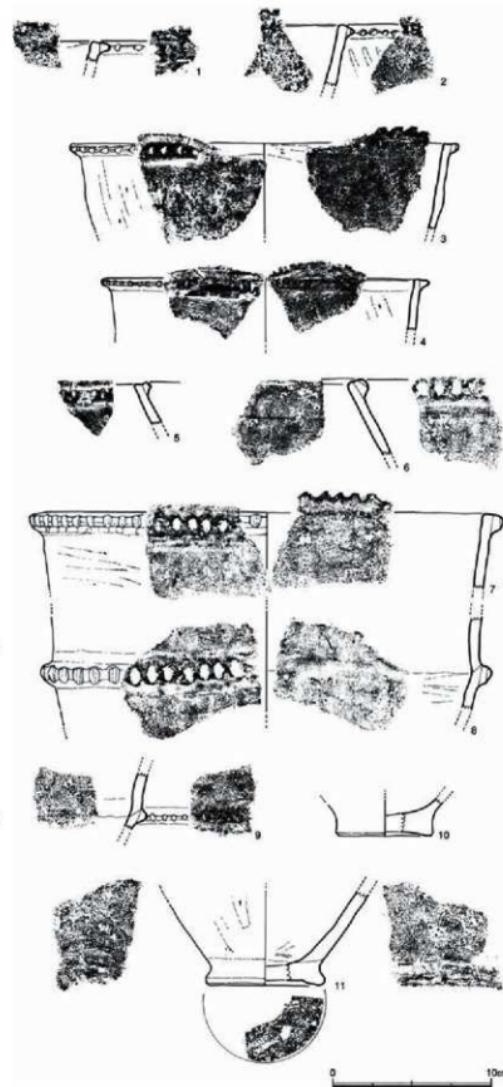


Fig.41 SD01 壺穴出土遺物図① (縮尺 1/3)



テして貼り付けている。内面は細い工具で横ナデして繋ぎ目を消している。外面の色調は、7、8とも黄色を帯びた薄茶色で、やや焼成が甘いようである。胎土に砂粒は少ないが密でない。9は屈曲部。破片のために傾き不正確だが、体部上半へはやや外に開きながら延びている。突帯は断面三角形で刻み目や横ナデでその頂部は丸みがある。刻み目は浅く、不鮮明。10は径6cmの底部、わずかに上げ底で、ナデで滑らかである。外面に黒斑が残る。11は7、8の底部ではない。底径7.4cmで外端は丸く突き出している。

Fig.43は、古墳時代の土師器。12は小型丸底壺で、口径10.8cm。球形の胴部に直線的に開く口縁部が付く。精良土に近い胎土で、口縁部は外面とも丁寧ではないが横ミガキを施して滑らかな器面となっている。13は覆土上部で出土した。口縁端部と底部を欠いている。胴部が内側に縮まり球形になっている。口縁部の外傾は弱く、ほぼ直に近い。14はくの字形に外反する口縁部で、胴部との継ぎ目が残っている。15は胴部から緩やかに外湾して口縁部となる。外面は板状工具の粗いハケ目が付く。16は口径19.2cm。口縁端部は横ナデで微妙に上方に突き出たような断面をしている。胎土は精良土に近い。胴部を欠いているが鉢状の球形になるのだろう。17は把手。断面楕円形で短い。挿入式の接合であろう。18～23は高杯。

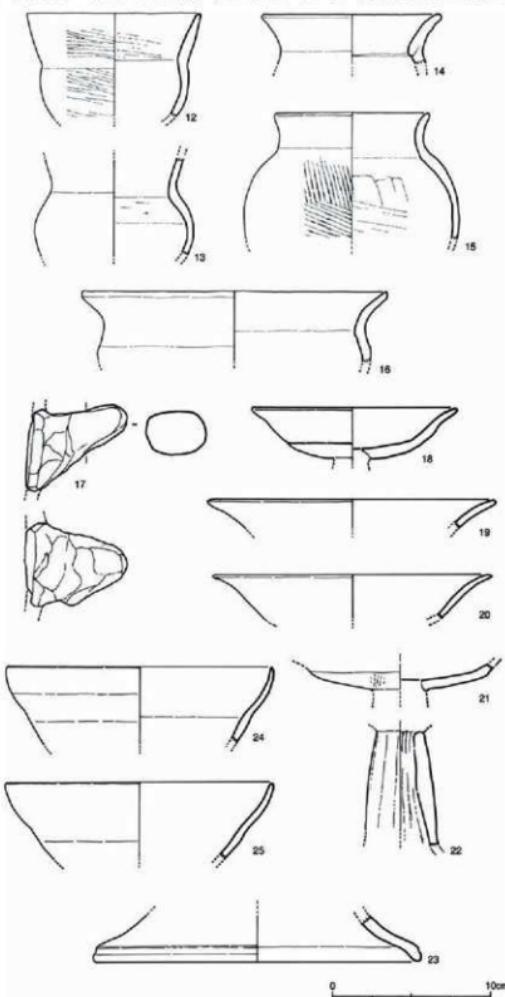


Fig.43 SD01 墓穴出土遺物図② (縮尺1/3)

18～20はSS01の下部で出土した。坏部の口径は13.2cm、高さ3.2cm。外面の中位よりやや下方で緩やかに屈曲しており、鈍い段がある。内外面とも丁寧な横ナデで、滑らかな器面となっている。19、20は坏上半部の破片。19は口径18.4cm。胎土に粒子の小さな砂粒が入る。20の口縁部はわずかに外湾しながら長く伸び、細丸くおさめる。内面は剥離しているが、薄い器壁の作りである。21は坏屈曲部より下半の破片。脚部も離脱している。外面は放射状に粗いハケ目の後に丁寧なナデを加えている。坏部内面は滑らかな器面となっている。22は高坏脚柱部。中程で膨らみがあり、上部内面には絞り痕が見られる。外面は幅7mm前後のヘラ状工具で上下にナデしている。23は高坏の脚部。裾部は大きく開き、端部は小さく屈曲して断面を丸く作っている。その外面は横ナデによる四線が巡る。24、25はSS01の下方で出土した。いわゆる外反口縁鉢で同一個体の可能性が強いが、傾きや器壁の



Fig.44 SD01 壺穴出土遺物

である。30 の天井部は膨らみがなく平らである。天井部のヘラ削りは約 1/3 を占め、幅広く粗雑である。短い直線のヘラ記号がある。31～38 は SS01 の下方から出土した。31～36 は受部が残る破片で、たちあがりの傾き、長さ、断面形状など細かな違いがある。31 は受部径 13cm、小さく水平に出た受部より直線的にたちあがりが延びている。器壁は薄い。32 も同じように小さな坏身で、たちあがりが細長い。33 は受部がやや厚く、たちあがりが短い。34 の受部径は 14.4cm でやや大きい。たちあがりは断面三角形で底面を幅広くして接合している。底部のヘラ削りは約 1/2 を占め、底部内面は焼成時に気泡状に剥離している。外面には痘痕状の窪みがある。底部にヘラ記号がかすかに残る。35 の受部は水平に小さく突き出している。たちあがりは小さく短い。36 は小さい受部に三角形断面のたちあがりが直に付いている。37 は底部破片。ヘラ削り痕は不明瞭で、ヘラ記号も浅く弱々しい。38 は小さな底部で、ヘラ削りは幅広くて粗雑。ヘラ記号を付けている。

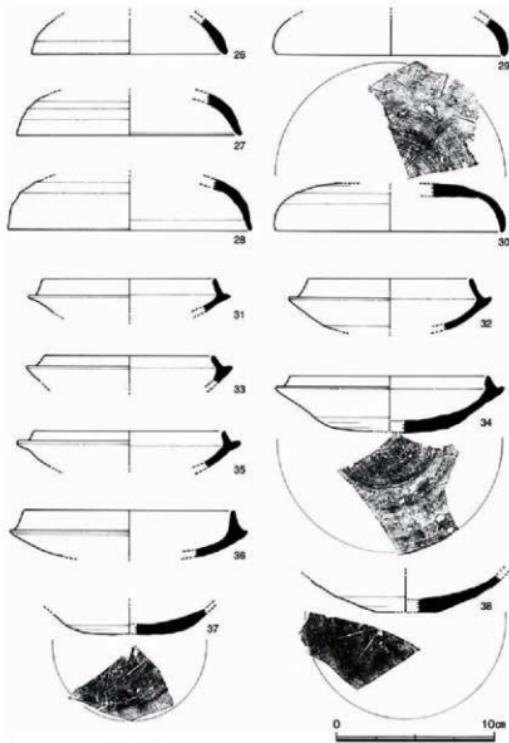


Fig. 45 SD01 壁穴出土遺物図③ (縮尺 1/3)

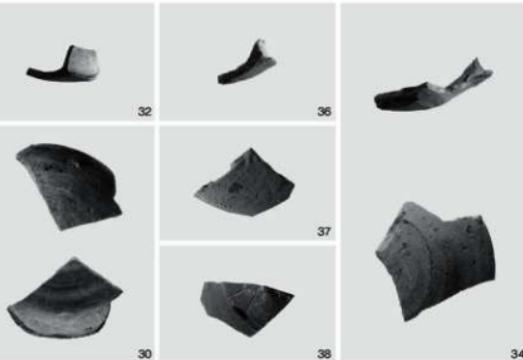


Fig. 46 SD01 壁穴出土遺物

3. 挖立柱建物跡

I、II区とも調査区全面に亘り20~50前後のピットが数多く見つかった。列をなすもの、布掘りのように長い溝の中に穿たれたものなどがあり、しかも規則的な配列であることから相当数の掘立柱建物跡があり、しかも同一方向で何度も建て替えられたと思われた。このため発掘作業では、ピットの切り合いで注意し、また巻き尺を実際に当てピットの間隔や並びを検討し、その可能性を遺構平面図に記入した。しかしこのピットも黒褐色土の埋土で、明確に切り合いで判断出来なかった。図上で掘立柱建物跡と捉えても、それらの柱穴の出土遺物に時期差はないか、あるいは深さや間隔などが不揃いでなく規則性や規格性があるかなどを確かめることができないが、時間的な余裕がなく、これらの検討を怠つためにあえて発掘時点では番号を付けなかった。資料整理の段階で側柱列の柱穴がほぼ等間隔に並んで長方形に完結し、出土遺物にも大きな矛盾のない9棟を掘立柱建物跡とした。しかしいずれも各柱穴の出土遺物は少なく、一つの建物に断定できる決め手を欠いている。図上操作ではあと数棟追加することも可能であろう。

先に発行された114次調査報告書では、認定した12棟の掘立柱建物跡にSB01~12の番号が付き、加えて15次調査区の4棟にもSB13~16の番号が与えられている。そこで本書では混乱を避けて114次調査報告書からの番号を引き継ぎSB13より通し番号とした。また15次調査区にもかかっているSB08、10の2棟はすでに報告されているが、本書でも番号をそのままにして再度記述している。



Fig.47 114次調査 SB08 (北より)



Fig.48 114次調査 SB10 (北東より)

掘立柱建物跡計測表

遺構番号	SB08	SB10	SB13	SB14	SB15	SB16	SB17	SB18	SB19
規模(間数)	5×8	3?×6?	1×2	2×2	3×4	1×1	1×2	2×3	2×4
主軸方向	北東	北東	北西	北西	北西	北西	北西	北西	北西
主軸方位	N-55°-W	N-54°-W	N-32°-W	N-38°-W	N-30°-W	N-22°-W	N-70°-W	N-30°-W	N-27°-W
北梁間全長	420cm	484	184	314	416	240	東列 303	326	150
南梁間全長	358	446	185	314	424	240	西列 302	326	150
東桁行全長	608	736	416	324	608	256	北列 373	372	276
西桁行全長	608	760	416	324	608	256	北列 373	372	273
面積m ²	255.4	367.8	77.0	101.7	252.9	61.4	113.0	121.3	41.4
備考	114次調査と重複	114次調査と重複		縦柱建物	北、東側柱部は布掘り				東側柱穴2個欠

SB08 捩立柱建物跡 調査区東端境界、SC03 の南隅を切っている。SC03 とはほぼ同じように北東方向の5×8間の側柱建物である。いま図の上部を北梁間とすると南梁間の長さは北梁間より62cm短い。桁行の長さは東西ともほぼ等しく、割に整った平面プランである。しかし柱穴の堀方、柱間、深などは平面プランに比べ意外と不揃いである。114 次で柱径は10~20cmと推測されている。柱穴から古墳時代土師器と須恵器の小片が出土しているが、図化できなかった。

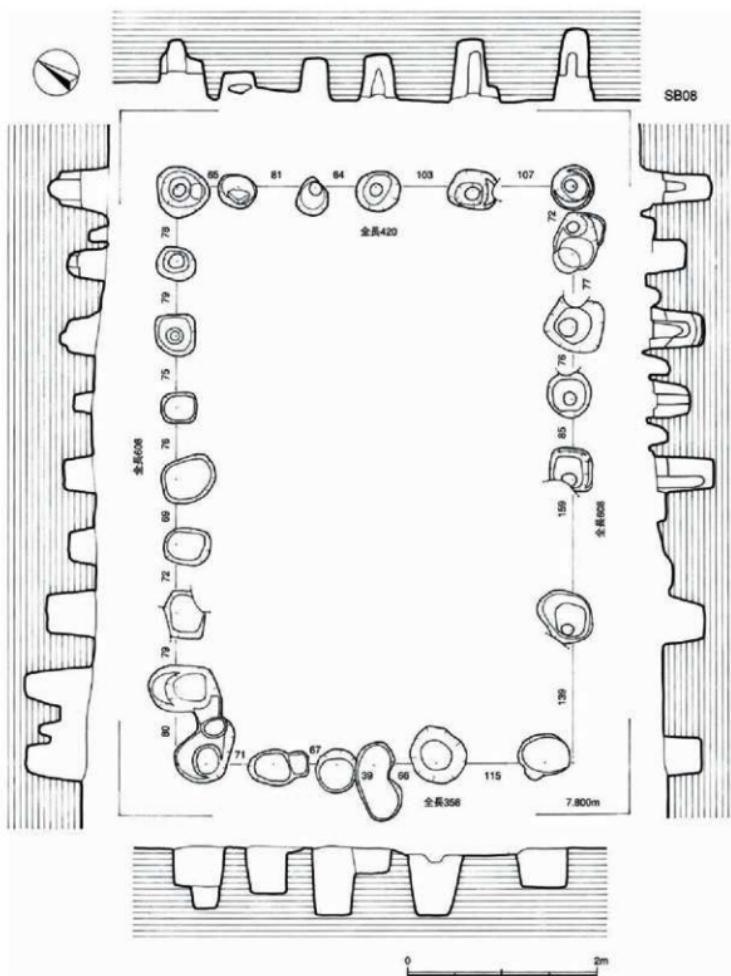


Fig.49 SB08 捩立柱建物跡図 (縮尺1/50)

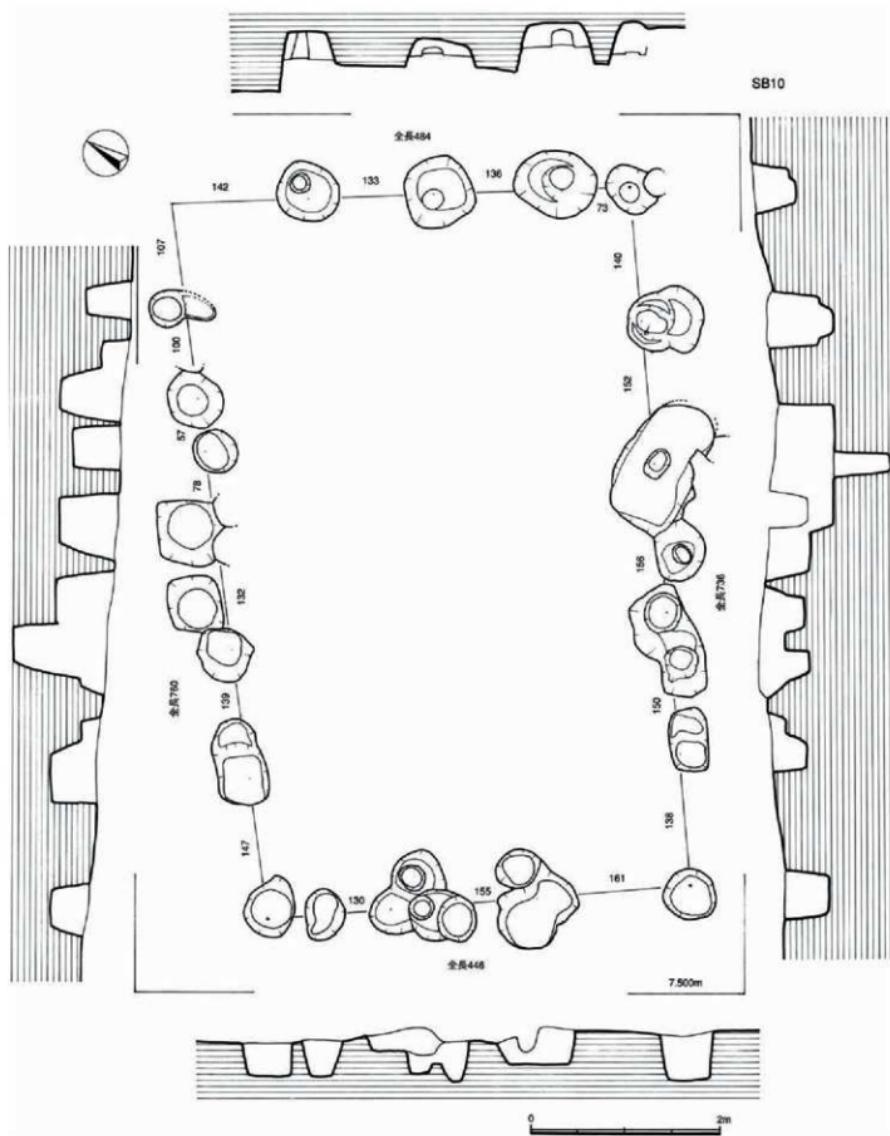


Fig.50 SB10 据立柱建物跡図（縮尺 1/50）

SB10 挖立柱建物跡 II区の南寄りに位置し、北東隅をSB08、西側をSB15と重なっている。SB15とはほぼ直交する。15次調査ではほぼ規模が想定出来ていたが、114次調査で残りの南東隅を検出し全形が明らかになった。しかし柱数が欠けており、梁間、桁行とも長さが異なり、かなり歪な平面プランである。また柱間、柱穴堀方プランとも不協いでであることから、果たして1棟と認定できるかや躊躇した。しかし北と東柱列には柱径が分かる堀方もあり、その大きさや深さは他の掘立柱建物跡に比べしっかりした印象であることからSB10とした。SB08同様に柱穴からは古墳時代の土師器や須恵器の小片が出土しているが、図示出来る大きさではなかった。

SB13 挖立柱建物跡 II区北西隅寄りのピット数がやや希薄な場所で検出した。伊佐氏によると区画整理事業前にはこの部分に地境があったとのことで、旧畠地面でN-24°-E方向、幅約18mの溝状落ち込みを確認した。SB13はこの地境にかかるて検出した北西方向の1×2間の掘立柱建物である。やや柱穴堀方が小振りのものがあり気になるが、相対する側柱の柱間が正確に等しく、その配置も直角であることから1棟とした。柱径が分かる柱穴堀方が1個あるが他は不明。各柱穴の深さは大差なく、底部標高は10cm内の差に収まっている。15次、114次とも多くのピットが密集しており、1×1間、1×2間掘立柱建物跡は相当数認定出来そうだが、SB13、16、17のみで意外に少ない。

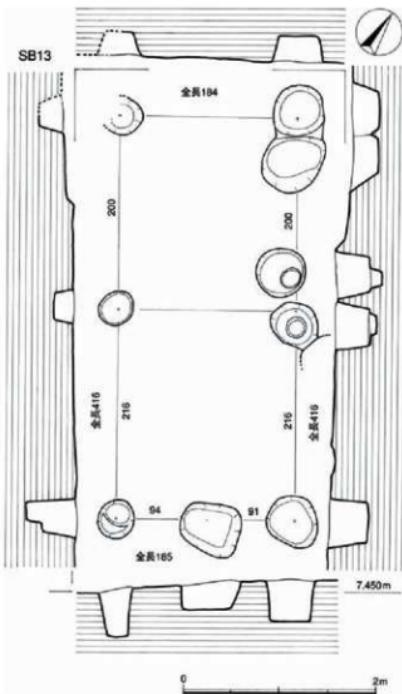


Fig.51 SB13 挖立柱建物跡図（縮尺1/50）

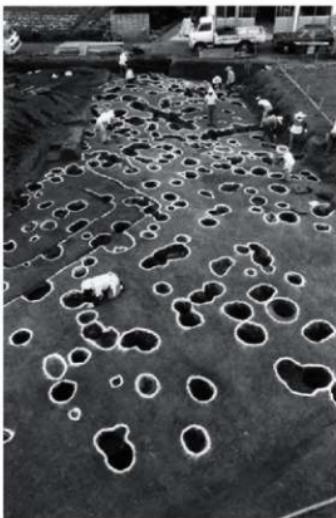


Fig.52 SB14 挖立柱建物跡（北より）

SB14 堀立柱建物跡

SB13の南東側に接するように位置する2×2間の純柱建物である。その長軸方向は6度とわずかにずれている。柱穴堀方は径38~50cm前後の円形か楕円形で、柱間は156~162cmときわめて正確な配置となっている。114次調査区と合わせても純柱建物はこの1棟のみである。出土遺物はSP202より出土した須恵器1点のみを図示できた。

出土遺物 Fig.54の1は須恵器蓋の破片。口径13.2cm、濃灰色の焼成で、胎土に大きめの砂粒を含んでいるために天井部のヘラ削りで露出している。口縁部内端部には明瞭な段はない。

SB15 据立柱建物跡

Ⅱ区南よりに位置し、SC04の北側約3mにある。南東部の約1/3がSB10と重なっている。地山面での遺構検出作業では、最初に幅約60cm、深さ約20cmの溝が直交するよ柱穴掘方が長楕円形のでさらに径40cm前後のしかし各柱穴掘方はあであり、等間隔の柱間その後城南区梅林遺跡

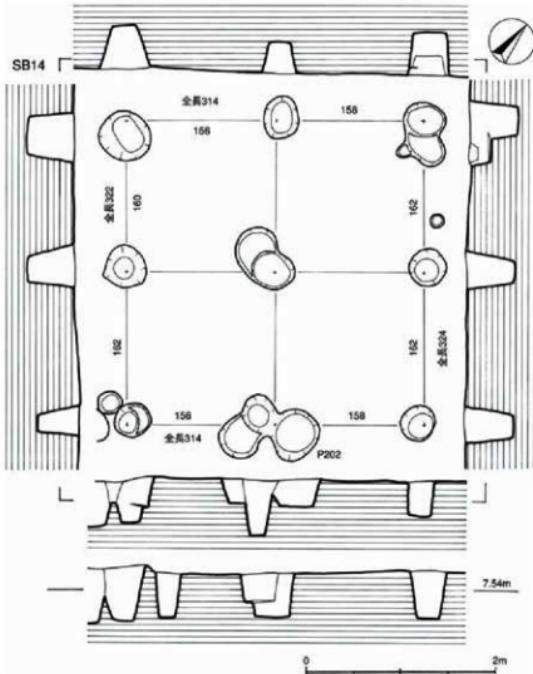


Fig.53 SB14 捜立柱建物跡図（縮尺 1/50）

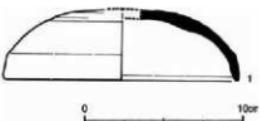


Fig.54 SB14 出土遺物図（縮尺 1/3）



Fig.55 SB14 出土遺物

出土遺物 3点の須恵器を図示する。1はSP81出土の坏蓋。口縁部が短く、口縁端部は明瞭な段を持つ。2は同じ柱列のSP97出土の坏蓋。同様な口縁端部の断面であるが、やや口縁部が長く、焼成も悪い。3はSP93出土の坏身。底部が扁平となり、浅い身の器形である。内傾するたちあがりは薄く、先細い作りである。受部は短く、わずかに上方に突き出している。

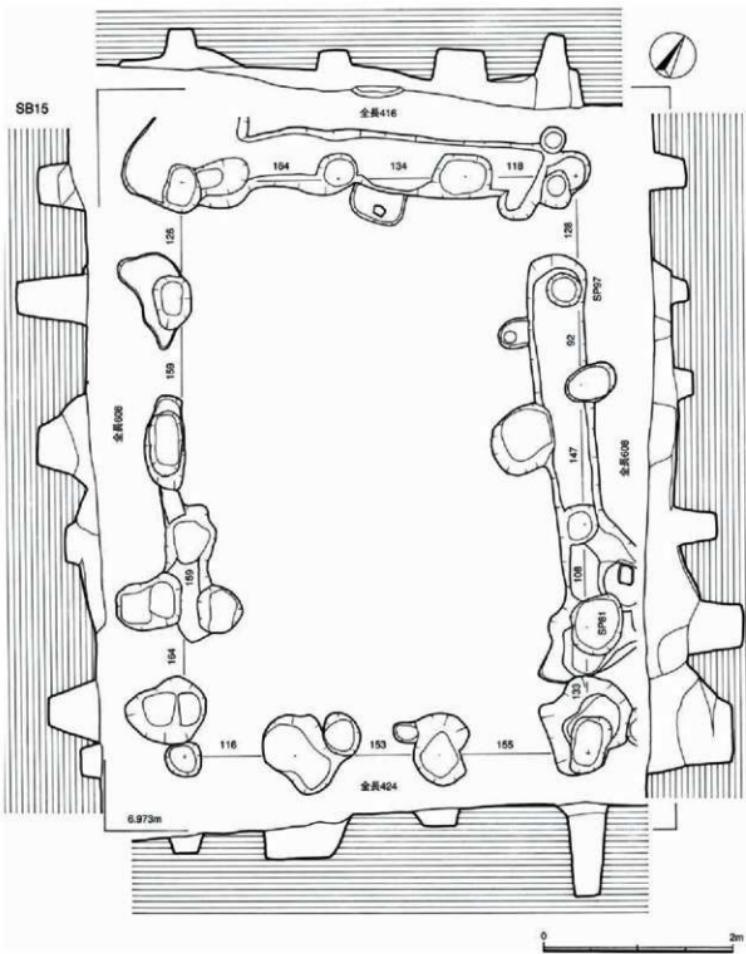


Fig.56 SB15 据立柱建物跡図 (縮尺 1/50)

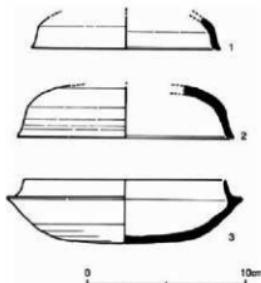


Fig.57 SB15出土遺物図 (縮尺1/3)

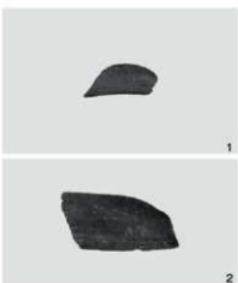


Fig.58 SB15出土遺物



SB16掘立柱建物跡 I区西端寄りで検出した。

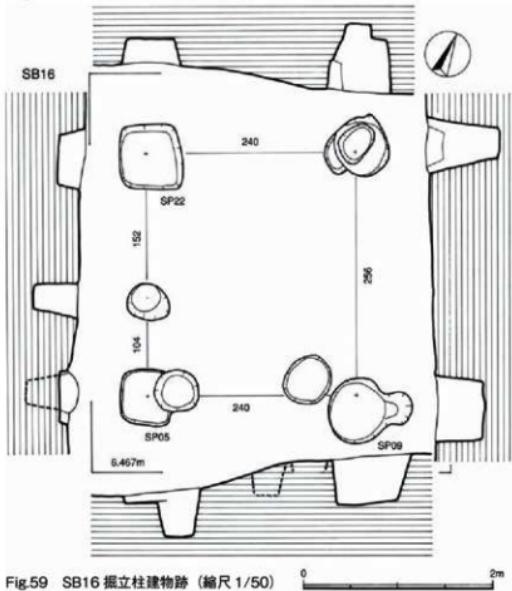


Fig.59 SB16掘立柱建物跡 (縮尺1/50)

出土遺物 Fig.60の1はSP09から出土した須恵器の壊蓋。天井部のヘラ削りは粗雑だが1/2を占める。口縁部は丸みのある断面となる。2は土製の輪羽口でSP05で出土。わずかに残った破片から外径58cm、内径18

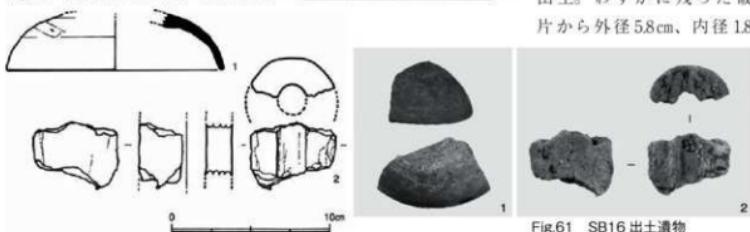
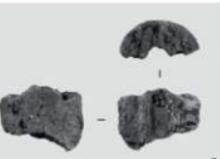


Fig.60 SB16出土遺物図 (縮尺1/3)

Fig.61 SB16出土遺物



cmの円筒状の形が分かる。外面には著しい熱変は認められない。有田遺跡群での羽口出土は6、22、33次調査など10か所を超す地点で出土例があるが、15次調査ではこの1点のみである。

SB17 振立柱建物跡 II区の南寄りでSB10、15と重なっている。この範囲はピットが最も密集していることから、地上操作では 2×2 間の柱穴を探せたが、SB10、15の柱穴を共用したり、加えて建

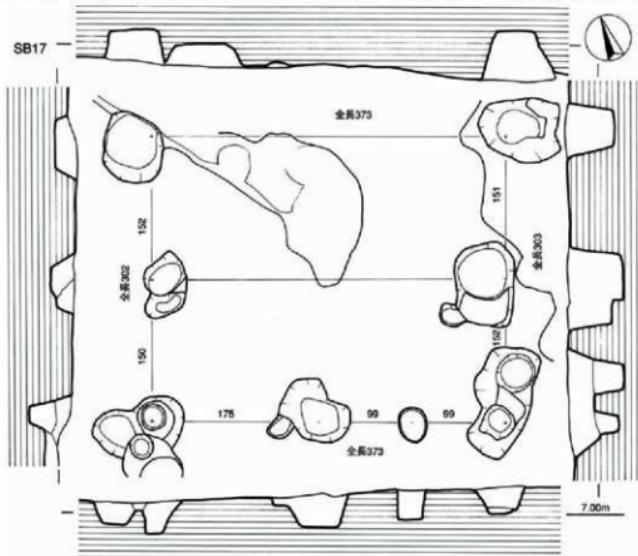


Fig.62 SB17 振立柱建物跡図（縮尺 1/50）

0 2m

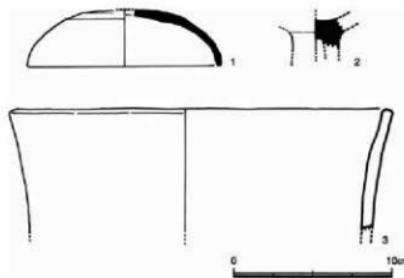


Fig.63 SB17 出土遺物図（縮尺 1/3）

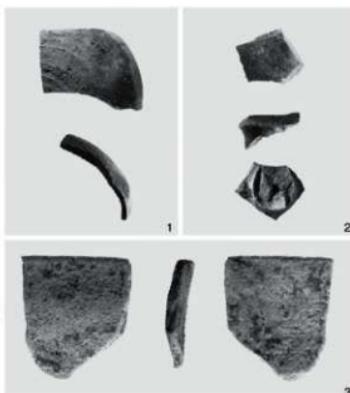


Fig.64 SB17 出土遺物

物の方向が他と異なるなど不自然さが目立つ。ただ、側柱の柱穴から遺物が出土し、掘立柱建物跡の可能性があること、また密集するピット群の時期を推測する資料になることから一応取り上げた。

出土遺物 Fig.63の1、2は須恵器、3は土師器。1は壺蓋で口径12.2cm、器高3.6cm。天井部のへ

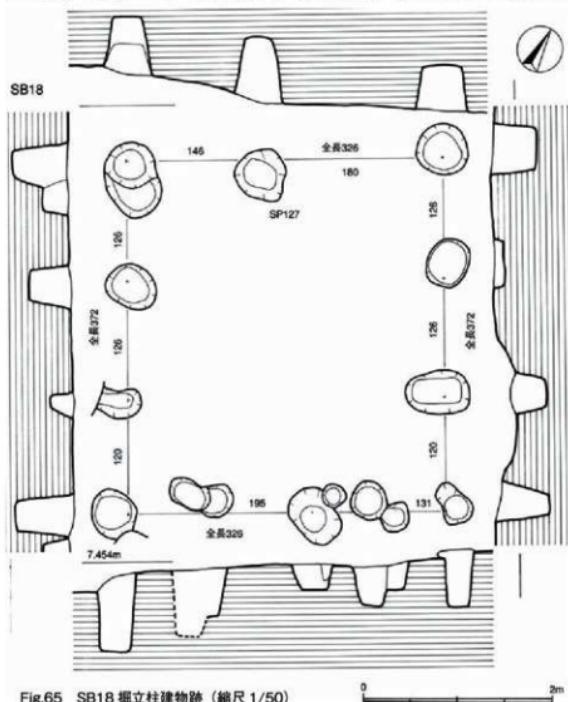


Fig.65 SB18 掘立柱建物跡（縮尺 1/50）

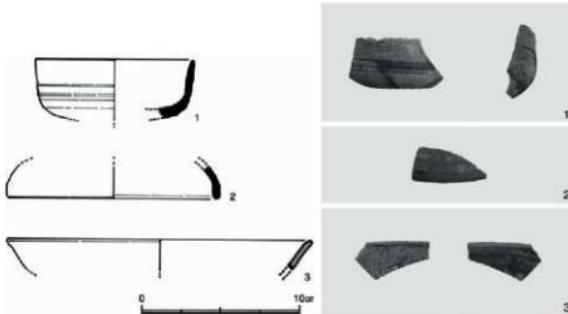


Fig.66 SB18 出土遺物図（縮尺 1/3）

Fig.67 SB18 出土遺物

ラ削りは1/3で輻轆回転は時計回り。2は高坏の坏と脚との接合部。径は3.4cmを測る。3の口縁部は微妙に凹凸しながら直線的に延びる。口径は26.2cmと大きく、器形不明。

SB18 捜立柱建物跡

I 区と II 区の接合部北寄りに位置する。西側に同じ方向で並ぶ SB19 との間隔は約 13 m しかない。2 × 3 間で、桁行側柱の対応する柱間は等しいが、梁間南北列の柱間は異なる。また柱穴堀方も円形、梢円形、隅丸長方形などさまざまで規格性に欠け、そ

の深さも一様ではない。
出土遺物 Fig.66 の 3
点とも SP127 出土。

1は須恵器で小型高坏の坏部。外面に中位に3本の沈線が巡る。2は須恵器の坏蓋。ほぼ直に立つ口縁部は短い。3は中国製青磁。軸は薄いオリーブ色で、全面に細かな貫入がある。珠光青磁だろう。

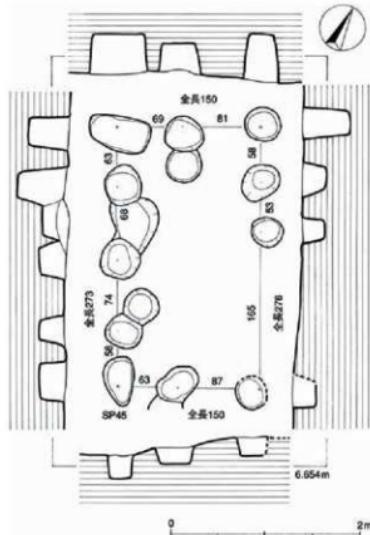


Fig.68 SB19 捩立柱建物跡図 (縮尺 1/50)

SB19 捩立柱建物跡 北西方向の細長い側柱建物。桁行東側柱列は境界杭の下に入り込み、1個の柱が未確認である。いま 2×4 間としているが、梁柱間が狭すぎ、建物としてもあまりにも小さい。

出土遺物 SP45 から出土。1 は須恵器の壺蓋。あるいは身か。2 は中国製の玉縁を持つ白磁碗。



Fig.69 SB19 出土遺物図 (縮尺 1/3)

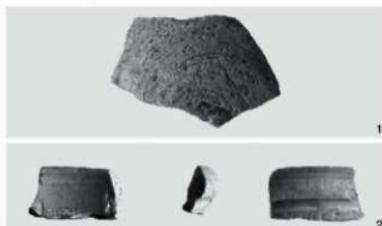
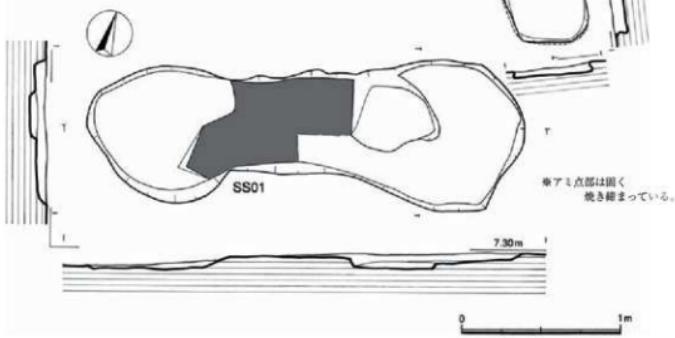


Fig.70 SB19 出土遺物

4. 製鉄関連遺構

II 区南東隅の包含層で鉄滓と焼土や炭化物が目立つことから、東に拡張し遺構の検出を試みたところ、中央部がやや締まった不整長楕円形の落ち込みと隅丸方形に整った土壤が現れた。当時の有田遺跡群ではこのような形狀の調査例はなく、よく観察しながら遺物の取り上げと遺構実測を行った。その後、西区大原 A 遺跡や西区元岡・桑原遺跡群などで発見例が増加した。また製鉄資料の集成や研究に取り組んでいる文化財部の長家伸氏より、製鉄炉の構造や鉄滓などの遺



物について教示を得る事ができ、製錬炉跡とその燃料の木炭を作っていた土壌と推測した。

SS01 製錬炉跡 長軸方位は N-73°-E。長軸長 2.75 m、西短軸長 85cm、東短軸長 95cm、中央部幅 60cm。周壁高は 5 cm 前後と低い。底面は平坦ではなく、中央東寄りは約 16cm と一段深くなっている。鉄滓が深くまで入り込んでいた。アミ点部は固く焼き締まり黒褐色となっており、最も鉄滓が集中している。構造が不明だがここが炉に当たるのであろう。出土鉄滓は、2 ~ 8 cm 大で、5 cm 大が最も多い。

コンテナ 2 箱分で総重量は約 12.5kg。他に古墳時代～古代の須恵器、土師器計 69 点が出土し、うち 7 点を図示した。

SK01 土壌 SS01 東端より北に約 30 cm 離れている。長軸方位は N-21°-W。隅丸方形プランで、長さ 80cm、幅 48 cm。4 壁は直ではなく底面近くでわずかに膨らんでいる。底面は中央部がやや盛り上がり、上面からの深さは約 11cm。4 壁とも赤く焼けて固くなっている。底面には炭化物が薄状に 3 ~ 5 cm の厚さに堆積していた。



Fig.72 SS01 製錬炉跡、SK01 土壌（西より）

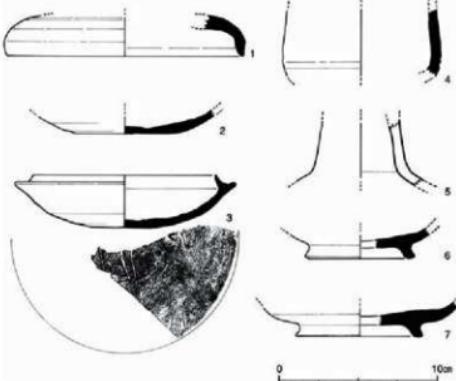


Fig.73 SS01 精錬炉跡出土遺物図（縮尺 1/3）

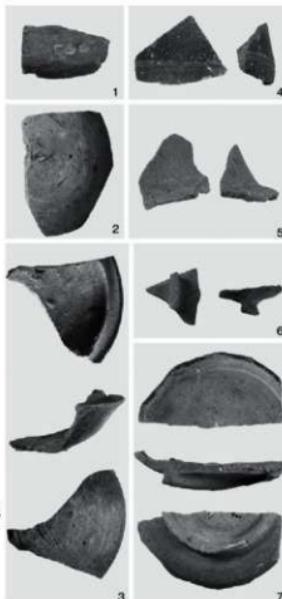


Fig.74 SS01 出土遺物

5. ピット出土の遺物

密集するピットは、すでに削平されて壁が残らない竪穴住居跡や掘立柱建物跡の柱穴の可能性がある。特に多くのピットが等高線と同じ南西-北西方向かこれと直交する配列であることから、さらに多くの掘立柱建物が推測される。今回は十分な検討が出来なかったことから、後日の検討作業に向けて出土遺物は細片でも実測に努めた。

Fig.75の1・2は石斧で、ともに刃部を欠いている。1は濃い灰色の玄武岩製で縦に大きく割れている。頭部が割に幅広い形状で、おそらく刃部は蛤刃状に研ぎ出されていたのだろう。残る身片面にはよく敲打痕が残っている。身断面は厚みがなく、大型石斧ではない。2は薄い灰色の軟質玄武岩の破片。一部に敲打痕が見られることから石斧と判断したが、割れた後に搔器のように再使用された可能性がある。3は粘板岩質の石材で、研磨などの顯著な加工痕はない。大きさから片刃石斧の未製品か。ただ湾曲しているとかすると、他の石器を想定すべきか。4は黒曜石の打製石鏽。わずかに先端部を欠いている。弥生時代の石器類が少ないので、弥生土器の出土数量とも割合が一致している。Fig.76、77は各ピット出土の土器類。突帯文土器から古墳、古代以降の土器までを含む。弥生土器は少なく、古墳時代6世紀末から7世紀前後の須恵器が多数を占める。竪穴住居跡や掘立柱建物跡の時期と重なり、先に推測したことを探付けている。

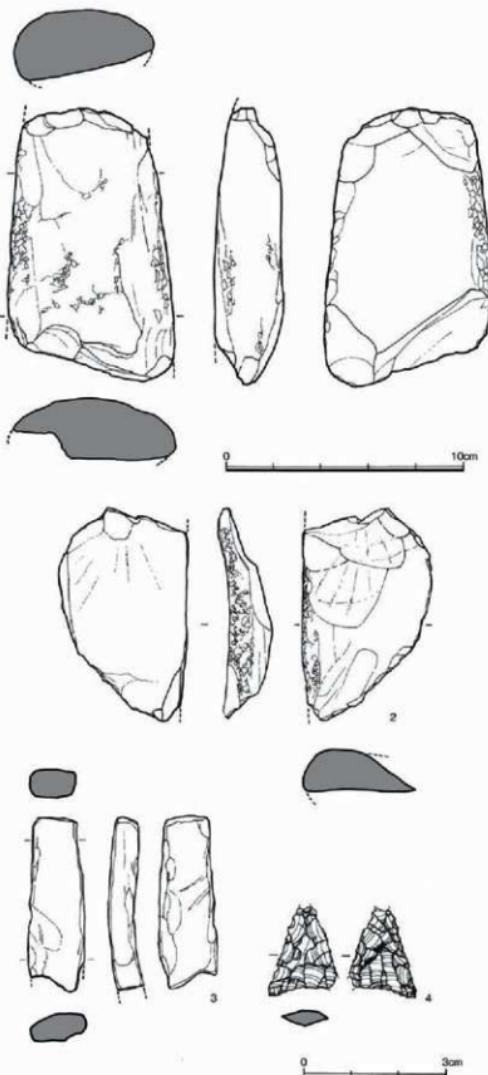


Fig.75 ピット出土遺物図① (縮尺 1/1, 1/2)

第8節 小 結

15次調査で検出、認定した遺構は、竪穴住居跡（SC01～04.06）5軒、竪穴（SK01）1基、掘立柱建物跡（SB08、10、13～19）9棟、製鍊炉跡（SS01）1基と土壙（SK01）1基、200を超すピットである。調査当時は周辺調査としては9次調査のみであまりにも情報量が少なく、この一帯の遺構展開、土地利用の内容を明らかにするまでには至らなかった。ただ古墳時代の竪穴住居跡に加えて、9棟の掘立柱建物跡を検出し、集落風景の一部を具体的に想像することができた。また奈良時代の製鍊炉跡と思われる遺構は、有田、小田部台地北半部での遺跡のあり方を予見する上で重要な調査となった。限られた紙数であるが、その後周辺部で行われた114次、152次、209次の調査成果を踏まえて、15次調査報告の結びとする。

15次調査地が位置する台地突出部は南東から北西方向に延びている。周辺3調査地の遺構は、東側の尾根線近くを避けて西側の緩やかな斜面に集中している。東側尾根線近くは後世の削平で遺構が消滅している可能性も否定できないが、居住空間としては西側斜面が適していたのだろう。114次調査報告書によると、掘立柱建物跡の長軸を尾根線方向に平行するⅠ類、直交するⅡ類、斜行するⅢ類の3様に分けている。

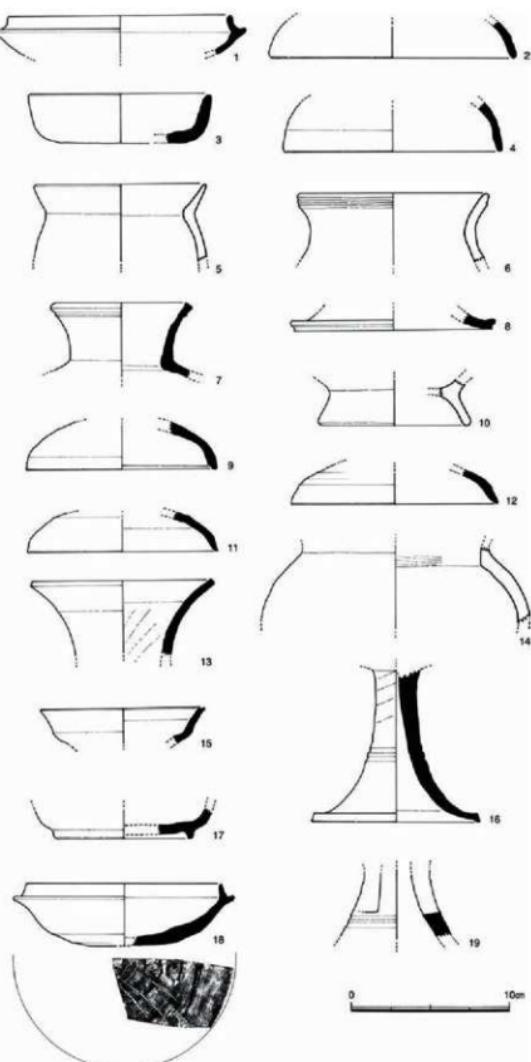


Fig.76 ピット出土遺物図② (縮尺 1/3)

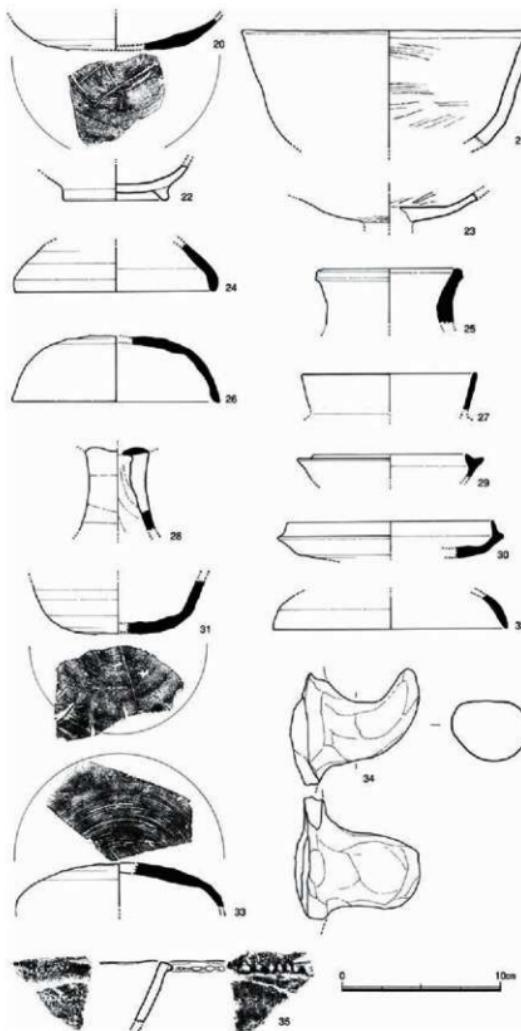


Fig.77 ピット出土遺物図③ (縮尺 1/3)

15次調査のSC01、02、04とSB13、
14、15、16、18、19がI類に、SC03、
SB08、10、がII類に、SC06、SB17が
III類に当たる。もちろんこれらは重
なっているものがあり、同時期に建ち
並んでいた訳ではない。また同時期で
もその間隔や配置を検討する必要があ
る。最後になったが、検出した各遺構の
時期について記しておく。5軒の堅
穴住居跡の多くは、床面出土の遺物が
少なく、確実な資料に恵まれなかつた。
そこで有田遺跡群での調査例から
その構造や規模などを参考にして、
SC01、03は4世紀代、SC04は6世紀
末から7世紀前後と推測できる。これ
らと切り合っているSC02、06も、そ
の前後と考えているが、長軸方向が異
なることから、ある程度の時期差を置
くべきかも知れない。いずれにして居
住地としては5・6世紀は長期間にわ
たってなぜか中断している。一方、掘
立柱建物跡は、総柱建物で倉庫と思わ
れるSB14、壁立ち建物と考えたSB15
などがあり、建物構成が興味深い。時
期は柱穴堀方出土の数少ない遺物に頼
らざるを得ないが、古墳時代6世紀末
から7世紀初頭前後であろう。SC04もほ
ぼ同時期に営まれていることから、集落
の内容を知るために掘立柱建物の機能や性
格究明が重要課題である。SK01堅穴の新
しい時期の遺物は、一部接するSC04の遺物とほ
ぼ同時期であることから、突帯文土器期か
らの產地に遺物が堆積し、SC04とほ
ぼ同時期に完全に埋没したものであ
ろう。SS01の製錬炉は、SK01、SC04の
上にあり、また鉄滓に混じて出土した
遺物から奈良時代8世紀代と推測で
きる。

第15回遺跡第15次調査出土遺物根柢表

頁 面	地圖番號	層位	出土位置	出土層位	種類	性質	埋藏環境	外觀顏色		土壤	地質	調查	
								層	色			層	色
1	100147	1区	3層	生土層	甕	器	210	深灰色	黑色	小砂粒包含	石	石質的土ナメ？	4cmの範囲
2	100328	1区	3層	生土層	甕	器	86	深灰色	黑色	2-3mmの砂粒	土	口縁部分ナメ、壁ナメ	8cmの範囲
3	100131	1区	3層	生土層	甕	器	162	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	底面全範
4	100129	1区	3層	土陶器	甕	器	210	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	8cmの範囲
5	100150	1区	3層	土陶器	甕	器	93	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	9cmの範囲
6	100010	1区	3層	土陶器	甕	器	146	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	全体の1/2
7	100145	1区	3層	土陶器	甕	器	60	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	11cmの範囲
8	100129	1区	3層	土陶器	甕	器	50	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	全体の4/5
9	100146	1区	3層	土陶器	甕	器	126	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	6cmの範囲
10	100102	1区	3層	土陶器	甕	器	150	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	12cmの範囲
11	100138	1区	3層	土陶器	甕	器	154	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
12	100133	1区	3層	土陶器	甕	器	142	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
13	100132	1区	3層	土陶器	甕	器	128	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
14	100131	1区	3層	土陶器	甕	器	74	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
15	100134	1区	3層	土陶器	甕	器	120	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
16	100141	1区	3層	土陶器	甕	器	96	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
17	100146	1区	3層	土陶器	甕	器	118	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
18	100065	1区	3層	陶器	甕	器	142	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
19	100059	?	4層	陶器	甕	器	128	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
20	100028	1区	3層	陶器	甕	器	130	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
21	100127	1区	3層	陶器	甕	器	29	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
22	100067	?	4層	陶器	甕	器	132	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
23	100125	1区	3層	陶器	甕	器	150	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
24	100144	1区	3層	陶器	甕	器	120	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
25	100034	1区	3層	陶器	甕	器	118	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
26	100127	1区	3層	陶器	甕	器	109	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
27	100031	?	4層	陶器	甕	器	116	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
28	100136	1区	3層	陶器	甕	器	130	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
29	100125	1区	3層	陶器	甕	器	132	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
30	100124	1区	3層	陶器	甕	器	35	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
31	100126	1区	3層	陶器	甕	器	138	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
32	100037	1区	3層	陶器	甕	器	118	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
33	100030	?	4層	陶器	甕	器	130	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
34	100137	1区	3層	陶器	甕	器	142	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
35	100126	1区	3層	陶器	甕	器	88	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
36	100126	1区	3層	陶器	甕	器	164	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
37	100022	1区	3層	陶器	甕	器	43	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
38	100026	?	4層	陶器	甕	器	149	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
39	100025	1区	3層	陶器	甕	器	85	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
40	100120	1区	3層	陶器	甕	器	25	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲
41	100164	1区	3層	陶器	甕	器	85	深灰色	黑色	砂粒少なくて、底ではない	土	底面に上部ナメ	16cmの範囲

頁	標印番号	基盤	出土位置・層位	種類	外觀	内観	色調	地土	被成	外觀・内観・質		調査	備考(写片の 大きさなど)	
										外觀色調	内観色調	外觀	内観	
1	100152	SC01	土器群	鉢	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良好	細かな鉢底なハケ日	ハケ日の泥に泥付日	泥付	泥付	
2	100002	SC01	土器群	鉢	青褐色	青褐色	青褐色	青褐色	良好	下部は土附の鉢底なハケ日	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
3	100151	SC01	土器群	鉢	褐色	褐色	褐色	褐色	良好	下部は土附の鉢底なハケ日	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
4	100003	SC01	土器群	鉢	褐色	褐色	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
5	100004	SC01	土器群	鉢	褐色	褐色	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
6	100153	SC01	土器群	鉢	褐色	褐色	褐色	褐色	不良	内付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
7	100155	SC01	土器群	鉢	褐色	褐色	褐色	褐色	不良	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
16	23	8	土器群	鉢	褐色	褐色	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
9	100006	SC01	土器群	鉢	褐色	褐色	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
10	100154	SC01	土器群	鉢	褐色	褐色	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
11	100007	SC01	土器群	鉢	褐色	褐色	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
12	100005	SC01	土器群	鉢	褐色	褐色	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
13	100007	SC01	土器群	鉢	褐色	褐色	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
14	100008	SC01	土器群	鉢	褐色	褐色	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
15	100001	SC02	土器群	鉢	褐色	褐色	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
16	28	2	100012	SC02	生糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
19	31	1	100064	SC02	S204	生糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附
20	34	2	100016	SC02	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附
24	41	6	100107	SC02	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附
25	7	100071	SC01	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
26	43	3	100063	SC01	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附
27	5	100116	SC01	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
28	8	100067	SC01	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
29	9	100069	SC01	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
30	10	100064	SC01	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
31	11	100068	SC01	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
32	12	100119	SC01	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
33	13	100116	SC01	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
34	14	100094	SC01	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
35	15	100099	SC01	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
36	43	16	100302	SC01	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附
37	17	100120	SC01	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
38	18	100096	SC01	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	
39	19	100067	SC01	便土	便糞土群	土器群	褐色	褐色	良好	全付の鉢底で明	口縁部は土附の鉢底なハケ日	土附	土附	

頁 次	辨認番号	層位	出土位置・ 層位	出土地・ 層位	層 期	地 質	口 徑	高 度	容 積	施 土		外 地 調 整		内 地 調 整		備考(追記など)
										内 地 色 質	外 地 色 質	内 地 順序	外 地 順序	内 地 順序	外 地 順序	
30	001001	S001	SS01の下	土壌層	高	高	176			普通	普通	1 m以下砂粒		普通	不明	5cmの範囲
21	001115	S001	覆土上部	土壌層	高	高				普通	普通	砂粒含む		ミガキ状のナメ		7cmの範囲
26	63	001020	S001	覆土上部	土壌層	高				普通	普通	砂粒含む		普通	不明	7cmの範囲
23	001003	S001	SS01の下	土壌層	高	高				普通	普通	砂粒少なし、 粘土質		普通	不規則	6cmの範囲
24	001003	S001	SS01の下	土壌層	高	高	168			普通	普通	ミガキ状のナメ		普通	不規則	10cmの範囲
25	001006	S001	SS01の下	土壌層	高	高	170			普通	普通	中粒砂、中砂		普通	不規則	10cmの範囲
35	111111	S001	覆土上部	須恵器	高	高	122			普通	普通	砂粒含む		普通	不規則	7cmの範囲
27	001122	S001	覆土上部	須恵器	高	高	142			普通	普通	大粒砂、ヘタ砂	1/3	普通	不規則	4cmの範囲
28	001010	S001	覆土上部	須恵器	高	高	153			普通	普通	大粒砂、ヘタ砂	1/4	普通	不規則	口縁部内部に2段
29	001009	S001	覆土上部	須恵器	高	高	146			普通	普通	小砂粒含む		普通	不規則	7cmの範囲
30	001013	S001	覆土上部	須恵器	高	高	144			普通	普通	砂粒含む		普通	不規則	4cmの範囲
31	001013	S001	覆土上部	須恵器	高	高	110			普通	普通	火炎を含む		普通	不規則	4cmの範囲
32	001012	S001	覆土上部	須恵器	高	高	104			普通	普通	火炎を含む		普通	不規則	5cmの範囲
28	65	001014	S001	覆土上部	須恵器	高				普通	普通	火炎を含む		普通	不規則	4cmの範囲
34	000003	S001	SS01の下	須恵器	高	高	144			普通	普通	火炎を含む		内山はナメ、黒褐色は即時消去		7cmの範囲
25	001018	S001	覆土上部	須恵器	高	高	120			普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		5cmの範囲
37	001004	S001	SS01の下	須恵器	高	高	134			普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		5cmの範囲
38	001017	S001	覆土上部	須恵器	高	高				普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		6cmの範囲
33	54	1	00006	SB14	S02c2	須恵器				普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		4cmの範囲
35	57	2	00005	SB15	S02b	須恵器				普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		13cmの範囲
3	00003	SB15	S02f	須恵器	高	高	138	34	45	普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		5cmの範囲
3	00007	SB16	S0209	須恵器	高	高	128	40		普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		9cmの範囲
35	60	1	00008	SB16	S0205	須絹口				普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		7cmの範囲
1	00002	SB19	S02f2	須恵器	高	高	122	36		普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		5cmの範囲
36	63	1	00004	SB20	S02b6	須恵器				普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		4cmの範囲
3	00001	SB20	S02f2	須恵器	高	高	262			普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		7cmの範囲
1	00000	SB21	S0127	須恵器	高	高	102			普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		5cmの範囲
37	66	3	00007	SB21	S0127	須恵器				普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		9cmの範囲
3	00007	SB21	S0127	須絹口	高	高	134			普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		7cmの範囲
3	00002	SB22	S0127	須恵器	高	高	193			普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		5cmの範囲
38	69	2	00002	SB22	S0125	須絹口				普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		4cmの範囲
1	000659	SS01	須恵器	高	高					普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		5cmの範囲
2	000068	SS01	須恵器	高	高					普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		9cmの範囲
3	00067	SS01	須恵器	高	高					普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		7cmの範囲
39	73	4	00060	SS01	須絹口	高	高			普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		6cmの範囲
5	00061	SS01	須絹口	高	高					普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		4cmの範囲
5	00061	SS01	須絹口	高	高					普通	普通	火炎を含む		内山はナメ		2cmの範囲

地 点	区 域	出 土 物	性 質	標 記	回 数	年 代	性 質	出 土 位 置	層 位	地 土				外 面 調 査		内 面 調 査	備 考	
										高 度	透 通	幅 度	深 度	幅 度	高 度	幅 度	高 度	
40	1	100066	S901	須 心 形	1	100165	1.8	西	石 斧	8.0	80	灰 色	小豆色含 沙	小豆色含 沙	青	高台面端チ ー	高台面端チ ー	壁片(片 岩)
40	2	100214	S9124	須 心 形	2	100166	1.8	西	石 斧	8.72	5.35	151	深灰色	灰式石斧	青	黒い部分と「刀部」近く、全体 で大きく削り落とした形状で、鋸歯状の 刃が残っていることなどから石斧とした。	黒い部分と「刀部」近く、全体 で大きく削り落とした形状で、鋸歯状の 刃が残っていることなどから石斧とした。	壁片(片 岩)
40	3	100166	1.8	西	3	100166	1.8	1.0	1.0	7.20	2.22	116	青灰色	粗粒石質	青	刀部の裏側に、刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刀部の裏側に、刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
40	4	100226	S9146	須 心 形	4	100167	S9026	須 心 形	石 磚	1.85	1.49	936	黑色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
40	5	100230	S9031	須 心 形	5	100166	S9041	須 心 形	石 斧	1.81	1.16	311	黑色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	6	100020	S9052	土 脚 器	6	100021	S9053	土 脚 器	石 斧	1.08	1.05	108	黑色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	7	100091	S9064	須 心 形	7	100091	S9067	須 心 形	石 斧	1.82	1.05	107	黑色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	8	100098	S9070	須 心 形	8	100098	S9083	須 心 形	石 斧	1.20	1.34	356	黑色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	9	100094	S9091	須 心 形	9	100094	S9101	須 心 形	石 斧	1.22	1.34	34	黑色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	10	100063	S9101	中世土 脚 器	10	100044	S9106	須 心 形	石 斧	1.20	1.05	98	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	11	100084	S9111	須 心 形	11	100083	S9111	須 心 形	石 斧	1.30	1.16	356	黑色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	12	100084	S9111	須 心 形	12	100083	S9112	須 心 形	石 斧	1.66	1.05	34	黑色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	13	100084	S9112	須 心 形	13	100084	S9112	須 心 形	石 斧	1.66	1.05	34	黑色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	14	100084	S9114	須 心 形	14	100084	S9114	須 心 形	石 斧	1.04	1.05	104	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	15	100089	S9115	須 心 形	15	100088	S9115	須 心 形	石 斧	1.08	1.05	108	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	16	100093	S9116	須 心 形	16	100096	S9116	須 心 形	石 斧	1.20	1.05	86	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	17	100096	S9117	須 心 形	17	100096	S9117	須 心 形	石 斧	1.24	1.05	40	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	18	100095	S9117	須 心 形	18	100095	S9117	須 心 形	石 斧	1.24	1.05	40	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	19	100097	S9119	須 心 形	19	100097	S9119	須 心 形	石 斧	1.28	1.05	40	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	20	100081	S9123	須 心 形	20	100081	S9123	土 脚 器	石 斧	1.28	1.05	386	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	21	100082	S9123	土 脚 器	21	100082	S9129	内 門 土 脚 器	石 斧	1.28	1.05	386	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	22	100088	S9129	内 門 土 脚 器	22	100088	S9129	内 門 土 脚 器	石 斧	1.28	1.05	386	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	23	100089	S9130	須 心 形	23	100089	S9130	須 心 形	石 斧	1.28	1.05	386	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	24	100091	S9134	須 心 形	24	100091	S9134	須 心 形	石 斧	1.28	1.05	386	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	25	100072	S9137	須 心 形	25	100072	S9137	須 心 形	石 斧	0.94	1.05	42	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
41	26	100002	S9157	須 心 形	26	100002	S9157	須 心 形	石 斧	1.20	1.05	42	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
42	27	100049	S9189	須 心 形	27	100049	S9189	須 心 形	石 斧	1.10	1.05	410	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
42	28	100088	S9194	須 心 形	28	100088	S9194	須 心 形	石 斧	1.20	1.05	410	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
42	29	100068	S9207	須 心 形	29	100068	S9207	須 心 形	石 斧	1.22	1.16	410	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
42	30	100087	S9210	須 心 形	30	100087	S9210	須 心 形	石 斧	1.22	1.16	410	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
42	31	100091	S9210	須 心 形	31	100091	S9210	須 心 形	石 斧	1.22	1.16	410	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
42	32	100062	S9210	須 心 形	32	100062	S9210	須 心 形	石 斧	1.22	1.16	410	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
42	33	100073	S9215	須 心 形	33	100073	S9215	須 心 形	石 斧	1.22	1.16	410	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
42	34	100092	S9217	須 心 形	34	100092	S9217	須 心 形	石 斧	1.22	1.16	410	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)
42	35	100065	S9217	須 心 形	35	100065	S9217	須 心 形	石 斧	1.22	1.16	410	深灰色	粗粒石質	青	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	刃を付けていたことを示す 打痕跡が残る。	壁片(片 岩)

ふりがな	ありた・こたべ よんじゅうご							
書名	有田・小田部 45							
図書名								
卷次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	971							
編著者名	力武卓治							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 TEL 092-711-4667							
発行年月日	西暦 2008年3月17日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	***	***	m ²		
ありた・こたべ 有田遺跡群 第15次調査	ふくおかしさわらこたべごじょうめ ごじゅうよんぱいんちごう 福岡市早良区小田部5丁目 54番1号	40132	7829	33° 34° 08°	130° 19° 55°	19780828 ~ 19781002	500	個人専用 住宅
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
有田遺跡群 第15次調査	集落	古墳時代、古代	古墳時代-堅穴住居跡5 +堅穴1+掘立柱建物跡 9+製鉄関連遺構2+ ピット	弥生時代-弥生土器 +石器/古墳時代- 土師器+須恵器/古 代-土師器+須恵器 /中世-土師器+輪 入陶磁器	古墳時代の堅穴住 居と掘立柱建物で 構成された集落/ 古代の製鉄関連遺 構			
要約	有田遺跡群が展開する台地の北西端部に位置する。西側斜面に堅穴住居と掘立柱建物で構成される古墳時代集落が営まれている。周辺の調査でも同じように古墳時代の堅穴住居跡と掘立柱建物跡が検出されており、古墳時代前期から後期まで連続する集落を確認出来るようになった。加えて古代の製鉄関連遺構の検出は、台地での生業や土地利用を究明する上で重要な調査成果である。							

有田・小田部 45

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第971集
2008年(平成20年) 3月17日発行

発行 福岡市教育委員会

〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号
電話 092-711-4667

印刷 久野印刷株式会社

〒812-0023 福岡市博多区奈良屋町3-1
電話 092-262-5726

The Report of The Research
of Burial Cultural Properties
Fukuoka City Vol. 971

Arita – Kotabe Site 45

Fukuoka City

17 March, 2008

Fukuoka City Board of Education